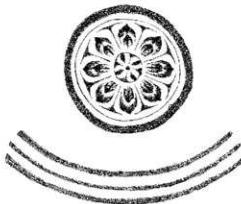


宮城県仙台市

郡山遺跡 33

郡山遺跡 33

— 平成24年度発掘調査概報 —
郡山遺跡・与兵衛沼窯跡



—平成二十四年度発掘調査概報—

2013.3

仙台市教育委員会

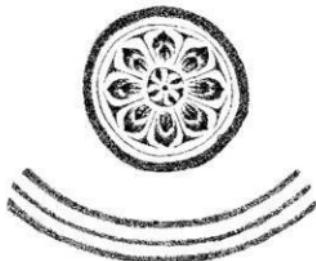
仙台市教育委員会

二〇一三年三月

宮城県仙台市

郡山遺跡 33

— 平成24年度発掘調査概報 —
郡山遺跡・与兵衛沼窯跡



2013.3

仙台市教育委員会

序 文

日頃より仙台市の文化財行政に対しご理解、ご協力を賜り感謝申し上げます。市内には現在約800ヵ所の遺跡が確認されております。このような埋蔵文化財はその時代ごとにその地に住んだ人々の痕跡を伝える大切なものです。現代の各種開発行為によって絶えず破壊・消滅の恐れにさらされております。当委員会としましては皆様のご理解とご協力を得て、重要な文化財を保存し、後世に伝えるように努めているところであります。

ここにご報告いたします郡山遺跡は、地方官衙としてはわが国でも最古段階の重要な遺跡です。幻の城柵として一端を現した昭和54年以来、継続的に実施してまいりました発掘調査により、古代の文献に記録のない“幻の城柵”はまさに“甦る城柵”として私たちの前に明らかになってきました。当時は辺境とされていた当地方の歴史観を一変した最古の地方官衙・郡山遺跡の発見は、日本の考古学・古代史に大きな影響を与えたものと確信しております。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、市内の各所で大きな被害が出ました。早期の復旧・復興が望まれる中、昨年度に引き続き今年度も個人住宅建築または建替えに伴う調査件数が増加傾向にあります。また同震災により、宮城野区与兵衛沼の水利施設の復旧工事のため水位を下げたところ、沼北岸の沼底から窯跡が発見されました。そこで確認調査を実施したところ、8世紀中頃における当地域の窯業の様子が明らかになってきました。本書はそれらの調査結果を報告・公開するものであります。

発掘調査の継続が出来ましたのも遺跡の究明にご助言をいただいた先学の諸氏や、市民の皆様のご協力があったからだと感じております。早期に復旧・復興がはかられ、市民生活の回復がなされるとともに、これまでの調査成果が遺跡保護や整備、文化活動に寄与することを願ってやみません。今後とも皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年3月

仙台市教育委員会
教育長 青沼 一民

例 言

1. 本書は国庫補助事業による市内遺跡調査のうち、郡山遺跡内の個人住宅建築工事に関連した発掘調査と、与兵沼遺跡での発掘調査報告である。

2. 本概報は調査速報を目的としている。執筆は以下のように分担した。

第1章 石山智之 第2章 I～Ⅲ・X・XI・XIII～XVI 大久保弥生 IX・XII 石山智之

第3章 大久保弥生 第4章 石山智之

3. 本書の作成に関わる作業は、以下のように分担し、編集は大久保弥生が行った。

遺物写真撮影：石山智之

遺物観察表・遺構記表作成：大久保弥生・石山智之

図版作成：大久保弥生・石山智之

4. 本書の内容は既に公開されている「平成24年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」「第39回 古代城柵官術検討会－資料集－」に優先する。

5. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの遺物は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 断面図の標高値は、海拔高度を示している。但し、海拔高度及び座標系は、平成23年（2011）3月11日の東日本大震災以前の値を使用している。

2. 第2章の図中に示した座標系は、郡山遺跡内に昭和56年に設定し、平成8年度に改訂した任意の座標系（X=0、Y=0を通る磁北線（1984年頃の偏角で、真北から $6^{\circ}44'7''$ 西傾））で表記している。

3. 文中の方位は、真北を基準としている。また、図中の方位に「☆」を付したものは真北を示し、これ以外の方位は郡山遺跡の座標系に沿った磁北を示している。

4. 遺構の略称は次のとおりである。遺構番号はこれまで調査された調査区を通しての番号順である。但し、ピットは調査区毎となっている。

SA：柱列・材木列 SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SI：竪穴住居跡 SK：土坑

SX：性格不明遺構 P：ピット・柱穴

5. 遺物の略号は次のとおりである。

A：縄文土器 B：弥生土器 C：土師器（ロクロ不使用） D：土師器（ロクロ使用）

E：須恵器 F：丸瓦・軒丸瓦 G：平瓦・軒平瓦 K：礫石器 N：鉄製品

6. 土師器実測図における網掛けは、黒色処理が施されていることを示している。

7. 遺物観察表中の法量で（ ）が付いた数字は、図上で復元した推定値である。

8. 土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原1989）を使用した。

9. 第1図は、1:10000「仙台駅」「長町」「西多賀」を使用し作成した。また、第3章第68図は、「仙台市文化財報告書第366集 与兵沼遺跡」第7図を引用し、加筆したものである。

10. 文中の土師器の記載は、とくに断りがない限りは非ロクロ調整である。

目 次

第1章 はじめに

I. 調査体制	1
II. 調査計画と実績	
1. 調査計画	1
2. 調査実績	1

第2章 郡山遺跡

I. 第216次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	4
2. 検出遺構と出土遺物	4
3. まとめ	7
II. 第217次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	8
2. 検出遺構と出土遺物	9
3. まとめ	10
III. 第218次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	12
2. 検出遺構と出土遺物	13
3. まとめ	14
IV. 第219次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	16
2. 検出遺構と出土遺物	16
3. まとめ	18
V. 第220次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	20
2. 検出遺構と出土遺物	20
3. まとめ	22
VI. 第221次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	23
2. 検出遺構と出土遺物	24
3. まとめ	25
VII. 第222次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	26
2. 検出遺構と出土遺物	26
3. まとめ	29
VIII. 第223次発掘調査	
1. 調査経過と調査方法	31
2. 検出遺構と出土遺物	31
3. まとめ	32

IX. 第225次発掘調査

1. 調査経過と調査方法	33
2. 検出遺構と出土遺物	33
3. まとめ	34

X. 第226次発掘調査

1. 調査経過と調査方法	35
2. 検出遺構と出土遺物	35
3. まとめ	36

XI. 第227次発掘調査

1. 調査経過と調査方法	38
2. 検出遺構と出土遺物	38
3. まとめ	38

XII. 第228次発掘調査

1. 調査経過と調査方法	39
2. 検出遺構と出土遺物	39
3. まとめ	40

XIII. 第229次発掘調査

1. 調査経過と調査方法	41
2. 検出遺構と出土遺物	41
3. まとめ	42

XIV. 第231次発掘調査

1. 調査経過と調査方法	43
2. 検出遺構と出土遺物	43
3. まとめ	46

XV. 第233次発掘調査

1. 調査経過と調査方法	48
2. 検出遺構と出土遺物	48
3. まとめ	49

XVI. 第234次発掘調査

1. 調査経過と調査方法	51
2. 検出遺構と出土遺物	51
3. まとめ	51

第3章 与兵衛沼窯跡－蟹沢地区南地点－

1. 調査経過と調査方法	53
2. 検出遺構と出土遺物	55
3. まとめ	65

第4章 調査成果の普及と関連活動

70

第1章 はじめに

I. 郡山遺跡・仙台平野の遺跡群・仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告の調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 文化財課長 吉岡恭平

整備活用係 係長 長島栄一、主任 斎藤克巳、主事 大久保弥生、文化財教諭 石山智之、

文化財教諭 鈴木健弘、専門員 木村浩二

調査調整係 係長 斎野裕彦、主査 平間亮輔、主事 水野一夫、主事 小泉博明、主事 及川謙作、

文化財教諭 佐藤高陽、文化財教諭 伊藤翔太、文化財教諭 千葉悟、文化財教諭 橋本勇人

調査指導係 専門員 篠原信彦

発掘調査・整理作業を適正に実施するため「郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会」を設置し、昨年まで指導・助言を受けていた。今年度は指導委員会委員更新の時期ではあるが、東日本大震災からの復旧に伴う発掘調査に限定せざるを得ず、個人住宅への対応にも通年を要したことから、今年度は休会せざるを得なかった。平成25年度以降、郡山遺跡と陸奥国分寺跡等の遺跡内での発掘調査の状況を踏まえて、再開の調整を図っていくこととする。

II. 調査計画と実績

1. 調査計画

平成24年度に計画した本書掲載の調査は、国庫補助事業である「市内遺跡発掘調査」の一部として計画し、郡山遺跡・与兵衛沼窓跡を対象とした。

郡山遺跡では第5次5ヶ年計画終了後に平成17年度から補足調査を実施してきたが、東日本大震災からの早期復旧・復興を考慮し、昨年度に引き続き個人住宅建築及び震災復興に関わる調査に特化して事業を計画した。

与兵衛沼窓跡では、同震災による水利施設復旧工事のため水位を下げたところ、沼北岸の沼底から窓跡が発見された。現地調査を行ったところ、瓦の分布が広範囲に見られ、さらに多くの窓跡が発見された。今回の調査は、震災復旧工事の終了を受けて再び沼への貯水が始まる前に、露出した窓跡の基数やグルーピング、年代、窓跡間の前後関係等を検討するため計画されたものである。

今年度の調査計画の内容については、平成24年3月21日に開催された郡山遺跡・陸奥国分寺跡等調査指導委員会において審議がなされ承を得ている。

発掘調査総経費は21,065,000円、国庫補助金額8,235,000円の予算で計画し、当初は郡山遺跡の個人住宅対応に6,721,080円、与兵衛沼窓跡の調査に2,158,200円、「仙台平野の遺跡群」として郡山遺跡以外の市域全体の個人住宅対応に7,592,000円とした。これによって本書の掲載に関わる発掘調査の実施計画を以下のように立案した。

調査次数	調査地区	調査予定期積	調査予定期間	調査原因
郡山遺跡	官衙内部など10箇所	300m ²	H24年6月～H25年3月	個人住宅建築
与兵衛沼北岸		2000m ²	H24年5月～H24年6月	重要遺跡の遺構確認調査はか

表1 平成24年度発掘調査計画

2. 調査実績

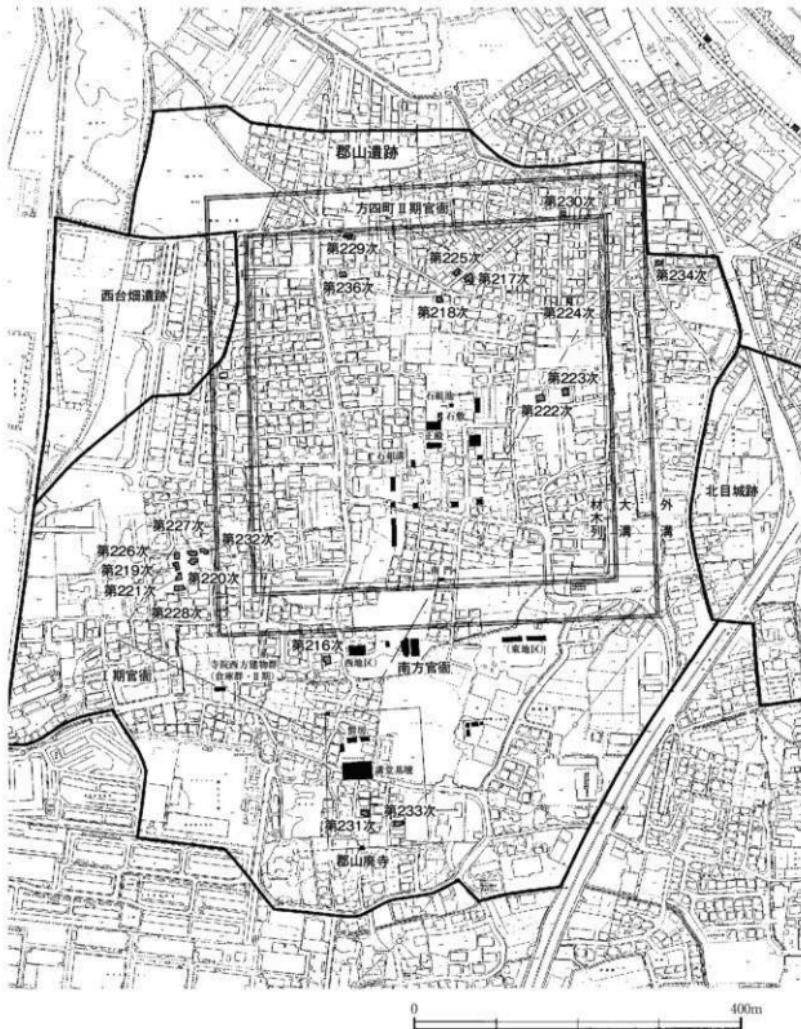
郡山遺跡については東日本大震災後の住宅建替えが増加し、個人住宅建築等で平成24年度は18箇所の調査を実施した。上記の発掘調査とは別に、仙台市北部の台原・小田原丘陵に位置する与兵衛沼において、同震災に伴う沼水

利施設工事のため水位を下げたところ新たな窯跡が沼北岸底面より露出した。このため、与兵衛沼窯跡での確認調査を実施した。なお、昨年度より同震災による個人住宅建築に関わる確認調査件数が急増したため、昨年度実施した第216次～221次の報告については本書への所取となった。また同様の理由から第236次・238次・239次の調査報告の詳細は次年度の報告とする。さらに震災復興交付金対象の住宅建替え工事に伴う調査結果については、仙台市文化財調査報告第416集「仙台市震災復興関係遺跡発掘調査報告」に所取されている。

遺跡名・調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	調査原因	対応
郡山遺跡 第216次	II期官衙南西部	56.0m ²	平成24年1月10日～1月19日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第217次	I期官衙北部	22.1m ²	平成24年1月10日～1月16日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第218次	II期官衙北部	32.0m ²	平成24年1月30日～2月16日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第219次	I期官衙南西部	28.5m ²	平成24年3月5日～3月13日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第220次	I期官衙南西部	37.1m ²	平成24年3月5日～3月19日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第221次	I期官衙南西部	27.6m ²	平成24年3月5日～3月19日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第222次	I期官衙東部	28.8m ²	平成24年5月16日～5月24日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第223次	I期官衙東部	24.0m ²	平成24年6月18日～6月26日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第224次	II期官衙北東部	6.3m ²	平成24年6月27日	個人住宅建築	仙台市震災復興関係遺跡発掘調査
郡山遺跡 第225次	I期官衙北部	6.0m ²	平成24年7月2日～7月4日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第226次	I期官衙南西部	21.0m ²	平成24年7月17日～7月26日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第227次	I期官衙南西部	30.0m ²	平成24年7月26日～8月1日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第228次	I期官衙南西部	27.0m ²	平成24年8月20日～8月27日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第229次	II期官衙北部	16.5m ²	平成24年9月3日～9月10日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第230次	II期官衙北東部	14.5m ²	平成24年9月6日～9月10日	個人住宅建築	仙台市震災復興関係遺跡発掘調査
郡山遺跡 第231次	郡山廃寺南部	39.1m ²	平成24年9月19日～10月3日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第232次	I期官衙南西部	32.2m ²	平成24年9月20日～10月15日	個人住宅建築	仙台市震災復興関係遺跡発掘調査
郡山遺跡 第233次	郡山廃寺南東部	60.7m ²	平成24年10月10日～10月15日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第234次	II期官衙北東部	14.0m ²	平成24年11月12日～11月16日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第235次	II期官衙内部	18.4m ²	平成24年12月1日～3日	個人住宅建築	仙台市震災復興関係遺跡発掘調査
郡山遺跡 第236次	I期官衙北西部	37.5m ²	平成24年12月4日～12月21日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第237次	I期官衙南部	19.6m ²	平成25年2月4日～2月7日	個人住宅建築	仙台市震災復興関係遺跡発掘調査
郡山遺跡 第238次	II期官衙南部	24.0m ²	平成25年2月19日～2月20日	個人住宅建築	郡山遺跡は小調査
郡山遺跡 第239次	郡山遺跡東部	28.0m ²	平成25年2月25日	店舗建築	郡山遺跡は小調査
与兵衛沼窯跡	与兵衛沼聖観地区魚地点	約2000m ²	平成24年5月8日～6月5日	遺跡確認調査	郡山遺跡は小調査

表2 平成24年度発掘調査実績





第2図 郡山遺跡全体図

第2章 郡山遺跡

I. 第216次発掘調査

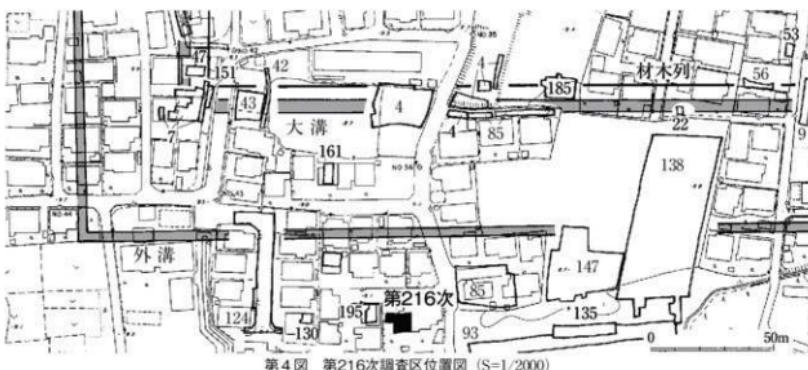
1. 調査経過と調査方法

第216次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成23年6月23日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成23年7月5日付H23教生文第106-67号で回答)に基づき実施した。調査地点は、郡山Ⅱ期官衙の南辺外溝の西部付近である(第2・4図)。

調査は、平成24年1月10日に着手し、18日に終了した。19日に重機により埋め戻しを行った。調査区は、建物建築範囲内に東西10m、南北3.5mの規模で設定した。重機により盛土及び旧耕作土であるI層を除去後、人力により基本層II層上面で遺構検出作業を行った。調査区の南東側に遺構が延びることが確認されたため、調査区の南側をさらに南北3.5m、東西6m拡張した。遺構の記録は、平面図・断面図を縮尺1/20で作成し、写真はフィルムカメラとデジタルカメラで撮影した。



第3図 第216次調査区配置図 (S=1/400)



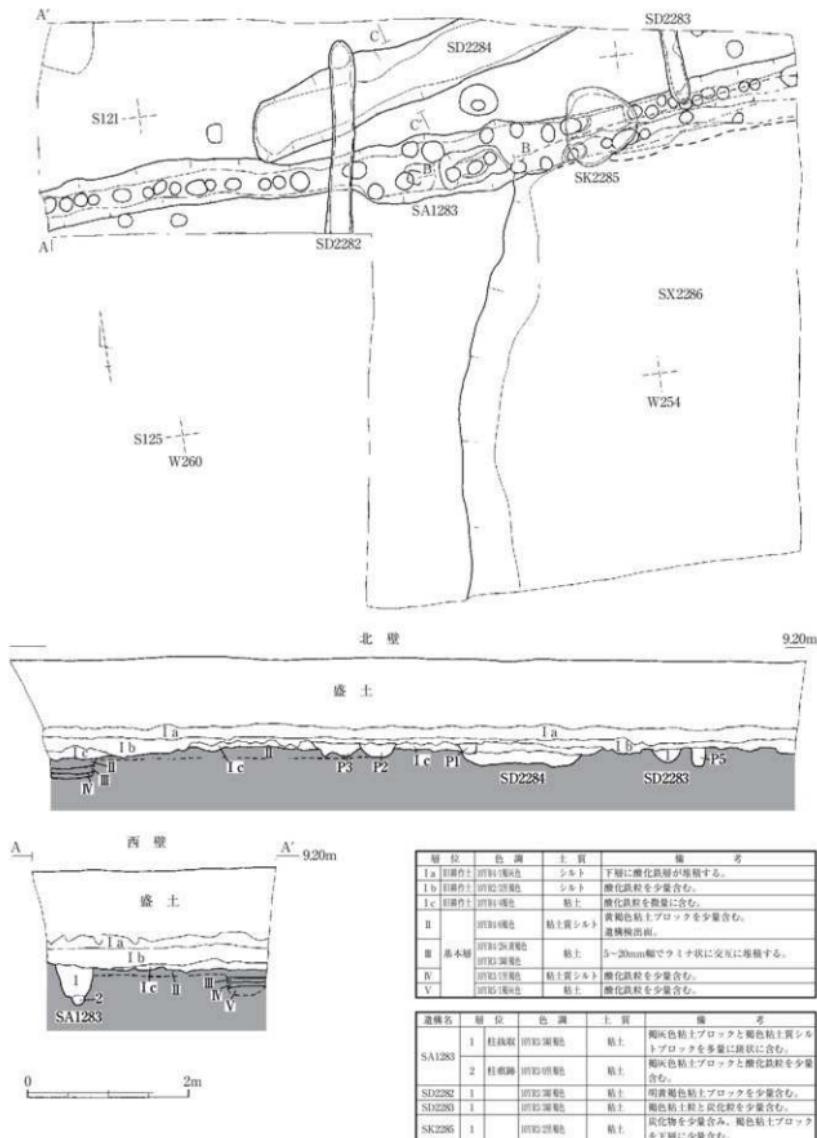
第4図 第216次調査区位置図 (S=1/2000)

2. 検出遺構と出土遺物

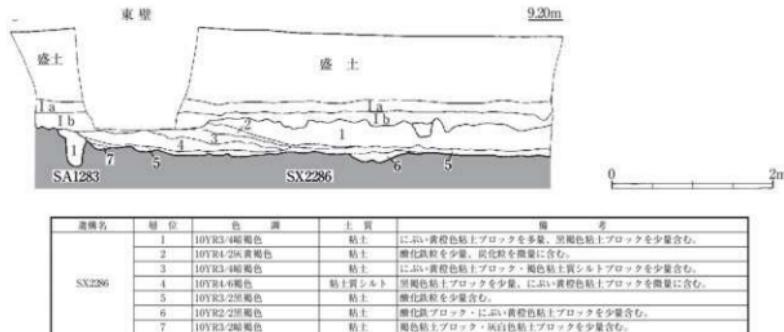
調査区内には、盛土が70~90cmあり、その下に旧水田耕作土と考えられるI層が30~40cmの厚さで堆積している。遺構は、さらにその下の基本層II層上面で検出した。

検出された遺構は、材木列1条、溝跡3条、土坑1基、性格不明遺構1基、ピット5基、柱穴1基である。ここでは、II層上面で検出された主な遺構について報告する。

【SA1283材木列】調査区北部に位置する。検出長は9.5mで、方向はE-5°-Nである。柱材は溝状に抜き取られている。抜き取り溝は、上幅40~70cm、下幅25~50cmで、断面形はU字形を呈する。深さは20~46cmを測り、掘り方底面より深い箇所もあり一定ではない。堆積土は暗褐色粘土の単層で、褐灰色粘土ブロックと褐色粘土質シルトの



第5図 第216次調査区平・断面図 (S=1/60)



第6図 第216次調査区断面図 (S=1/60)

ブロックを多量に含んでおり、その状況から人為的に埋め戻されたものと考えられる。抜き取り溝の底面において、掘り方の一部と直径10~35cm程の柱痕跡が45箇所で検出された。調査区西壁から東側へ38mの地点では、西側に比べ上幅が30cm程広くなり、柱痕跡が2列になっている。SK2285土坑、SD2282・2283溝跡、SX2286性格不明遺構と重複し、これらより古い。

遺物は、抜き取り溝の堆積土中から土師器片が出土している。

【SD2284溝跡】調査区北部に位置する。検出長は4.5mで、上幅70~80cm、下幅30~50cmで、深さは13cmを測り、断面形は浅い皿型を呈する。堆積土は2層に細分される。SD2282溝跡と重複し、これよりも古い。

遺物は1層中より須恵器片が出土している。

【SK2285土坑】調査区北側で検出された。直径は90cm程で、平面形はやや丸い円形を呈し、断面形は浅い皿型を呈する。堆積土は2層に細分される。SA1283材木列とSX2286性格不明遺構と重複し、これらより新しい。

遺物は出土していない。

【SX2286性格不明遺構】調査区南東部に位置する。検出長は東西42m、南北6.6mで、深さは50cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面はほぼ平坦だが、所々に凹凸がある。また上層のIb層との境にも凹凸が目立ち、最大で約25cmの落込みが断面で確認される。堆積土は7層に細分される。I層は暗褐色粘土で、に多い黄褐色粘土ブロックが多量に混入しており、人為的に埋め戻された層であると考えられる。また2層と5層は酸化鉄の粒子が混入しており、水性堆積層と考えられる。SK2285土坑とSA1283材木列と重複し、SK2285よりも古く、SA1283材木列よりも新しい。堆積土中から土師器片が出土しているが、いずれも小片であるため時期等は不明である。

B SA1283 B' 7.90m



0 1m

第7図 SA1283材木列断面図 (S=1/60)

層構名	層位	色調	土質	備考
SA1283	2 柱痕跡	10YR3/2暗褐色	粘土	褐色粘土ブロックと酸化鉄粒子を少量含む。
3 挖り方	10YR2/2灰褐色	粘土	褐色粘土ブロックと灰褐色粘土ブロックを微量含む。	

C SD2284 C' 7.90m



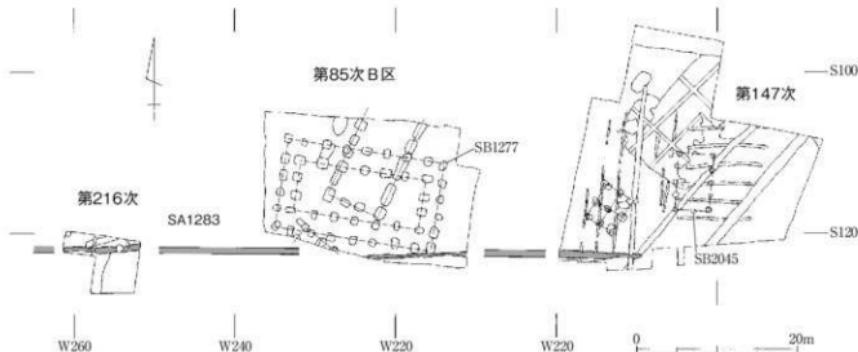
0 1m

第8図 SD2284断面図 (S=1/60)

層構名	層位	色調	土質	備考
SD2284	1 須恵器片	10YR3/2暗褐色	粘土質シルト	に多い黄褐色粘土ブロックを少量、炭化鉄粒子を微量含む。
	2 須恵器片	10YR4/2灰褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック主体で、に多い黄褐色粘土ブロックを少量含む。

3.まとめ

SA1283材木列は、検出位置や方向、堆積土の特徴などから、第85次調査B区と147次調査で検出されたSA1283材木列の西側の延長部分と考えられる。この材木列は、第147次調査で検出された郡山遺跡Ⅰ期官衙に関わるSA2005b材木列よりも新しく、郡山遺跡Ⅱ期官衙の時期のSD2086溝跡や、第85次調査B区で検出されたSB1277掘立柱建物跡柱建物跡よりも古いことが分かっており、また方位などからⅡ期官衙の時期に属するものと考えられている。それ以外の遺構に関しては、時期や性格等の詳細は不明である。



第9図 第85・147・216次調査区合成図 (S=1/600)



1. 調査区全景（東から）



3. SA1283全景（東から）



2. 調査区西壁断面（東から）



4. SA1283断面（東から）

写真図版1 第216次調査区

II. 第217次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

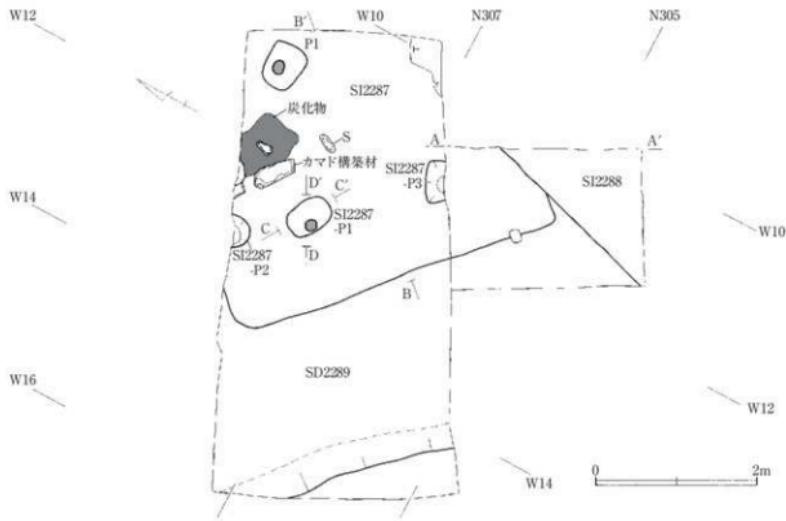
第217次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成23年12月1日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成23年12月7日付H23教生文第106-275号で回答)に基づき実施した。調査地点は郡山1期官衙の北東部に位置する(第2・11図)。調査は、平成24年1月10日に着手し、16日に終了した。その後、重機により埋め戻しを行った。調査区は、建物建築範囲内に東西6m、南北3mの規模で設定した。重機により盛土及びI層を除去し、基本層II層上面で遺構検出作業を行った。調査区の東部で検出された遺構の規模を明らかにするため、調査区の南側を東西2.4m、南北25m拡張した。遺構の記録は、平面図・断面図を縮尺1/20、1/40で適宜作成し、写真はフィルムカメラとデジタルカメラで撮影した。



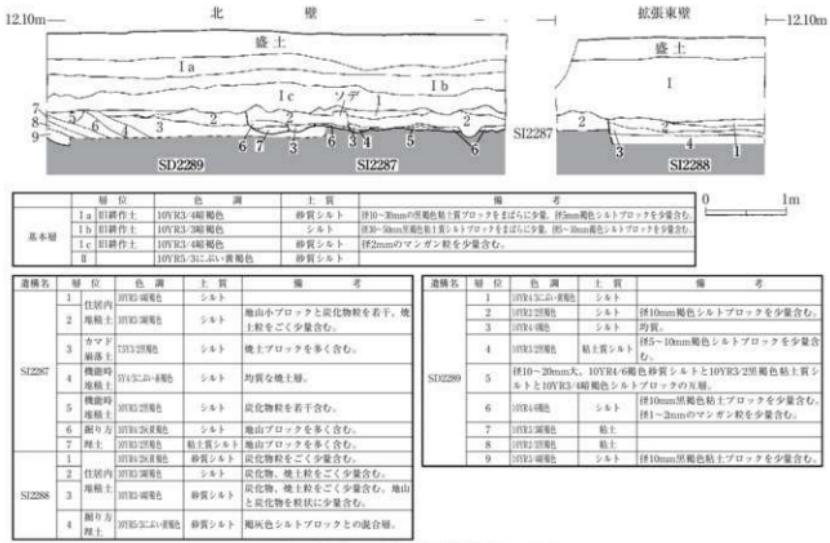
第10図 第217次
調査区配置図 (S=1/400)



第11図 第217・218・225次調査区位置図 (S=1/1500)



第12図 第217次調査区平面図 (S=1/60)



第13図 第217次調査区断面図 (S=1/60)

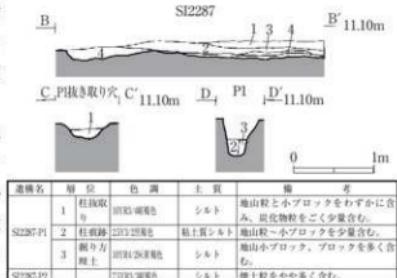
2. 検出遺構と出土遺物

調査区内の盛土は30cm程で、その下に旧耕作土であるI層が50cm程の厚さで堆積している。遺構はさらにその下のII層上面で検出した。

検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、溝跡1条、柱穴1基である。ここでは、検出された主な遺構について報告する。

[SI2287竪穴住居跡] 調査区北部に位置する。削平を受け、西側の堆積土と床面が失われている。平面形は方形を呈するものと推測される。検出した規模は、東西3.5m、南北4.15mである。堆積土の層厚は最大で20cm程である。1~3層は、いずれも自然堆積層である。4層は掘り方理土である。4層上面を床面としている。床面上で3基のピットを検出した。このうち、SI2287-P1・P3は位置や規模から主柱穴の可能性がある。SI2287-P1は柱材の抜き取り穴と考えられる。カマドは北壁に設置されており、燃焼部と側壁の一部が残存していた。燃焼部は東西0.3m、南北0.1m以上で、断面形は浅い皿状を呈する。側壁は凝灰岩の切石を芯材としたものと考えられる。燃焼部の全面には、薄い炭化物層が広がり、その上面から砂岩とみられるカマド構築材が検出された。SD2289溝跡、SI2288竪穴住居跡、P1と重複し、SD2289溝跡よりも新しく、SI22888竪穴住居跡、P1よりも古い。

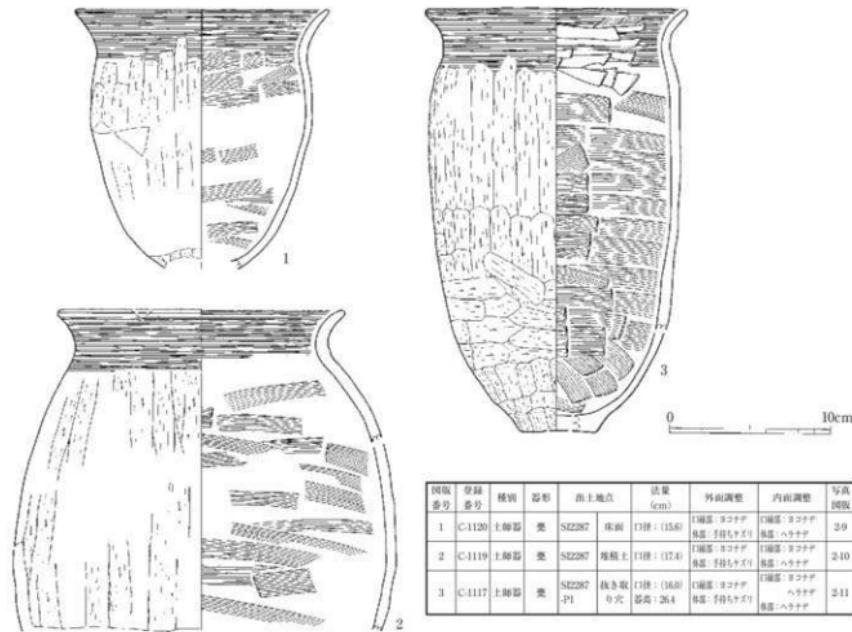
遺物は、住居内堆積土からC-1119土師器壺、床面からC-1120土師器壺、SI2287-P1抜き取り穴からは長胴て体部



第14図 SI2287断面図 (S=1/60)

が寸胴形のC-1117土師器甕が出土している（第15図1～3）。いずれも体部外面はケズリによって仕上げられ、全体が橙色に焼成されている。

【SI2288竪穴住居跡】調査区東部に位置する。部分的な検出のため平面形は不明である。検出した壁高は25cm程度である。堆積土は4層で、1～3層は自然堆積層、4層は掘り方埋土である。4層上面を床面としている。SI2287竪穴住居跡、SD2289溝跡と重複し、いずれより新しい。遺物は、住居内堆積土から土師器片が出土している。



第15図 SI2287出土遺物

【SD2289溝跡】調査区西部に位置する。検出した規模は、上幅5.5m、深さは40cm程度である。全体の規模は不明であるが、方向は東西方向とみられる。遺構の西壁は比較的急に立ち上がる。堆積土は9層に細分され、東に向かって緩やかに傾斜する黄褐色を呈する砂質シルトと黒褐色を呈する粘土質シルトの互層である。SI2287竪穴住居跡、SI2288竪穴住居跡、PIと重複し、いずれよりも古い。遺物は出土していない。

3.まとめ

SI2287竪穴住居跡は、凝灰岩の切石を用いてカマドの構築し、北武藏地域に見られる関東系土師器（C-1117土師器甕）が出土している。これらの点は、第19次調査区で検出されているSI79竪穴住居跡と共通する。今回出土した土師器（第15図1～3）は、形態や調整技法から7世紀中頃から後半頃のものと考えられる。本調査区周辺には、I期官衙の時期の住居群が分布しているものと推察される。SD2289溝跡は、規模から河川跡の可能性が考えられるが、周辺の調査では確認されておらず、遺物も出土していないことから、詳細は明らかにすることはできなかった。



1. SI2287床面検出状況（南から）



2. SI2287カマド構築材検出状況（南から）



3. SI2287-P1抜き取り穴断面
(北から)



4. SI2287-P1抜取り穴C-1117土師器
検出土状況（東から）



5. SI2287-P1断面（南東から）



6. SI2288検出状況（南から）



7. SD2289断面（南から）



8. P1断面（南から）



9. C-1120 土師器甕

10. C-1119 土師器甕

11. C-1117 土師器甕

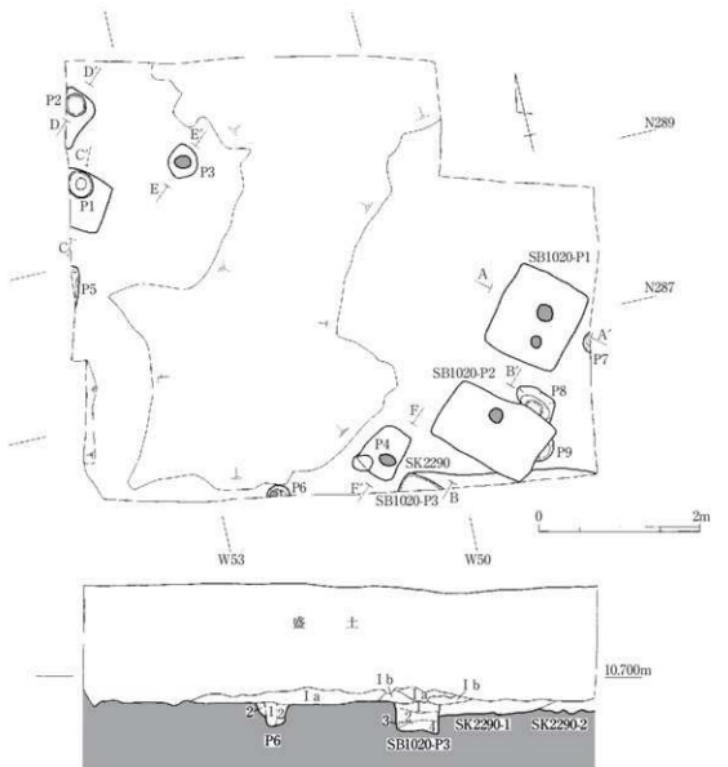
写真図版2 第217次調査区及び出土遺物

III. 第218次発掘調査

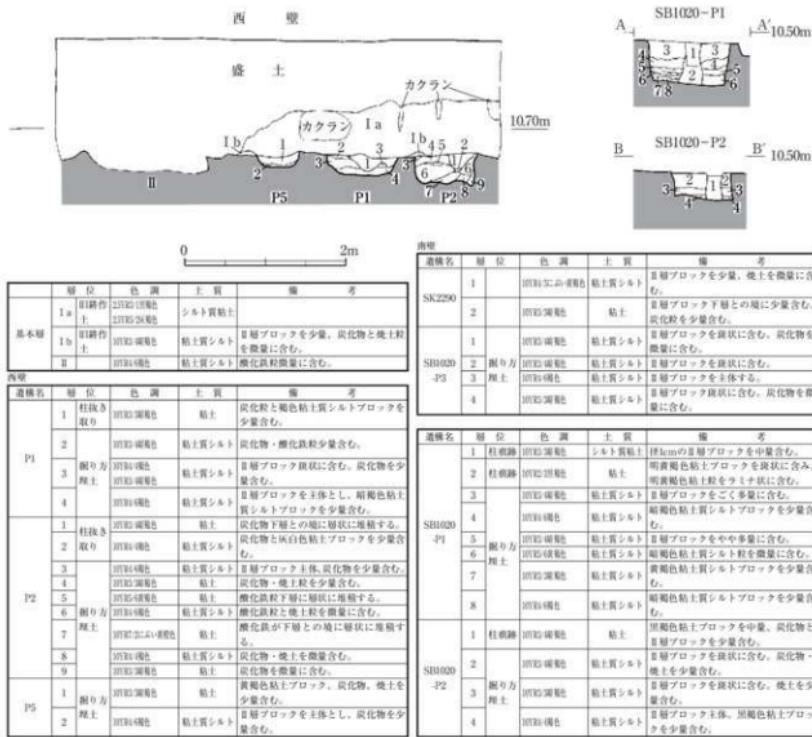
1. 調査経過と調査方法

第218次調査は、個人住宅建築工事に伴う発掘調査である。平成24年1月13日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年1月24日付H23教生文第106-333号で回答)に基づき実施した。調査地点は、郡山Ⅱ期官衙の北部にある(第2・11図)。

調査は平成24年1月30日に着手した。2月6日に調査を終了し、同日に重機により埋め戻しを行った。調査区は、建物建築範囲内東西5m、南北5mの規模で設定した。重機により盛土及び旧耕作土である1層を除去し、基本層II層上面で遺構検出作業を行った。調査区の南東側に遺構が広がることが確認されたことから、調査区をさらに南東側へ東西2m、南北3.5m拡張した。遺構の記録は、平面図・断面図を縮尺1/20で作成し、写真はデジタルカメラを用いて撮影した。



第17図 第218次調査区平面図・南壁断面図 (S=1/60)



第18図 第218次調査区西壁断面図 (S=1/60)・SB1020-P1・P2断面図 (S=1/60)

2. 検出遺構と出土遺物

調査区には盛土が80~140cmあり、その下に水田耕作土であるⅠ層が20~70cmの厚さで堆積している。遺構は、さらにその下のⅡ層上面で検出された。調査区中央部では、後世の擾乱によって遺構が失われていた。

検出された遺構は、掘立柱建物跡1棟、土坑1基、ピット9基である。ここでは、Ⅱ層上面で検出された主な遺構について報告する。

【SB1020掘立柱建物跡】 調査区南東部に位置する。柱穴は3基検出した。梁行2間以上（総長3.25m以上、柱間寸法140cm）の東西方向の掘立柱建物跡である。SB1020-P1の掘り方は、一辺が100~110cmの隅丸正方形を呈し、横出面と掘り方底面の2箇所の柱痕跡が検出された。SB1020-P2の掘り方は、長軸155cm、短軸80cmの隅丸長方形を呈し、柱痕跡が検出された。柱痕跡は、直径15~22cmの円形で、深さは42~52cmを測る。SB1020-P3は掘り方の北隅のみの検出である。掘り方埋土は暗褐色・褐色・黄褐色の粘土質シルトで、Ⅱ層ブロックを斑状に含む層が多い。SK2290土坑、P8、P9と重複し、これらより新しい。

遺物は、各柱穴の掘り方埋土と柱痕跡内から土師器、須恵器片が出土している。SB1020-P1の掘り方埋土中からは、返りの付いたE-573須恵器蓋が出土している（第19図1）。

遺構の検出位置と、SB1020-P1とSB1020-P2の柱間寸法が第68次調査で検出されたSB1020

掘立柱建物跡の梁行の柱間寸法とはほぼ同じで、柱穴の掘り方の形状や規模も類似することから、今回検出された3基の柱穴は、SB1020掘立柱建物跡出土遺物

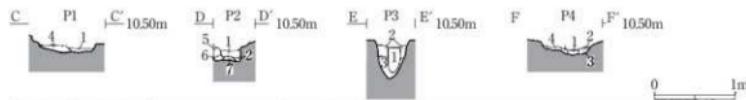
立柱建物跡の一部で、SB1020-P2・P3が北西側の梁行となり、SB1020-P1が北西隅の柱穴となると考えられる（第21図）。

【SK2290土坑】調査区の南東部の南壁際に位置する。一部のみの検出であり、遺構の全体は不明である。検出長は25mである。平面形は不明だが、検出された遺構の北端の状況から、竪穴住居跡の可能性がある。遺構の深さは20cm程度である。堆積土は2層に細分され、1層がにぶい黄褐色粘土色粘土質シルト、2層が暗褐色粘土で、それぞれに炭化物と焼土粒が混入する。SB1020-P2・P3と重複し、これらより古い。

遺物は出土していない。

【ピット】調査区北西部と南西部で計9基検出した。柱痕跡もしくは抜き取り痕跡を有する柱穴はP1～6の6基である。P1の掘り方は、一辺60cm程の隅丸方形を呈すると推測される。掘り方の北寄りに直径30cm程の円形を呈する柱抜き取り穴を検出した。P2の掘り方は、長軸60cm程、短軸40cm程の隅丸長方形を呈する。掘り方の北寄りに直径25cm程の円形を呈する柱抜き取り穴を検出した。P3の掘り方は直径40cm程の円形を呈し、掘り方の中央で直径20cm程の柱痕跡を検出した。P4の掘り方は、長軸60cm程、短軸45cm程の隅丸長方形を呈する。掘り方の南寄りで20cm程の柱痕跡を検出した。P1～6に対応すると見られる遺構は、本調査区からは検出されなかった。

遺物はP1とP3から土師器片が少量出土している。

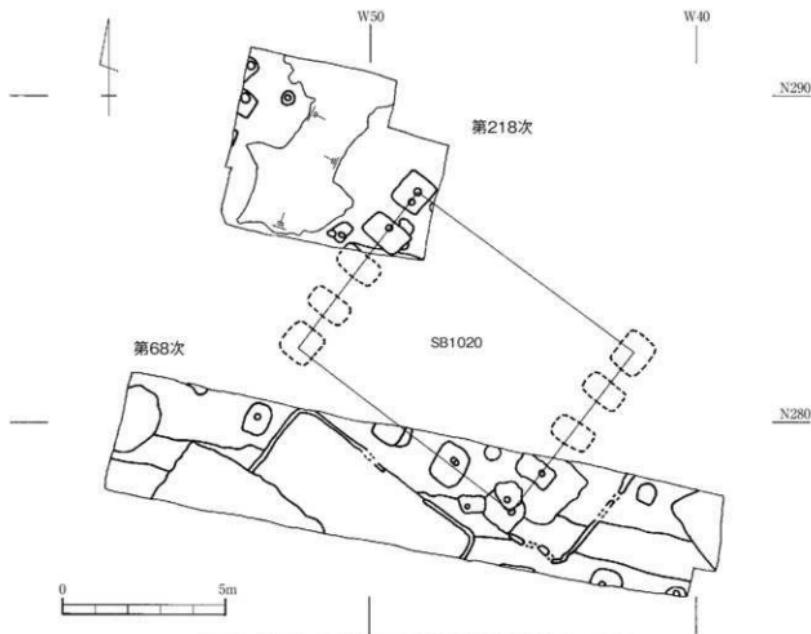


遺構名	層位	色調	土質	備考
P1	1 柱抜き取り	10YR3/3暗褐色	粘土	炭化物と褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
	4 掘り方埋土	10YR4/6褐色	粘土質シルト	Ⅱ層ブロックを主体とし、褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
P2	1 柱抜き取り	10YR3/4暗褐色	粘土	炭化物下層に褐色粘土を堆积する。
	2 掘り方埋土	10YR4/4褐色	粘土質シルト	炭化物と灰褐色粘土ブロックを少量含む。
P3	5 柱抜き取り	10YR5/6黄褐色	粘土	炭化物下層に褐色粘土を堆积する。
	6 掘り方埋土	10YR4/4褐色	粘土質シルト	炭化物と灰褐色粘土を微量含む。
P4	7 柱抜き取り	10YR7/2にぶい黃褐色	粘土	炭化物下層とにび黄色を含む。
	柱痕跡	10YR3/4暗褐色	粘土	褐色粘土質シルトブロックを中茎、炭化物を少量含む。
P3	2 挖り方埋土	10YR3/4暗褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック底面に含む、褐色粘土ブロック、炭化物を少量含む。
	3 挖り方埋土	10YR4/6褐色	粘土質シルト	Ⅲ層ブロック主体、炭化物を少量含む。
P4	1 柱痕跡	10YR3/4暗褐色	粘土	炭化物を少量、褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
	2 挖り方埋土	10YR3/3暗褐色	シルト質粘土	褐色粘土質シルトブロックを少量含む。
	3 挖り方埋土	10YR4/4褐色	粘土質シルト	褐色粘土質シルトブロックを底面に含む。
	4 挖り方埋土	10YR4/6褐色	粘土質シルト	Ⅱ層ブロック主体、炭化物を少量含む。

第20図 P1～4断面図 (S=1/60)

3.まとめ

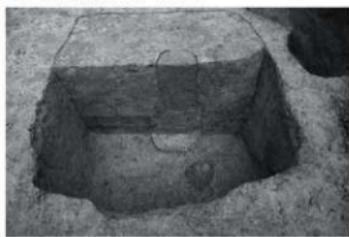
本調査では、官衙関連の遺構として、第68次調査で検出されたSB1020掘立柱建物跡の一部と考えられる柱穴が3基検出された。SB1020掘立柱建物跡はこれまでの調査や方位などから、I期官衙の時期に属するものと考えられている。SB1020-P2の掘り方埋土中から7世紀中葉のE-573須恵器蓋が出土しており、これまで考えられているSB1020掘立柱建物跡の時期とも矛盾しない。またP1～P9のからも柱痕跡が確認され、掘り方埋土の特徴などから官衙に関連する遺構の可能性があるが、詳細に関しては不明である。



第21図 第68次・218次SB1020掘立柱建物跡合成図 (S=1/150)



1. 調査区全景 (東から)



2. SB1020-P1断面 (南西から)



3. SB1020-P1～3 (南東から)



4. E-573 須恵器蓋

写真図版3 第218次調査区及び出土遺物

IV. 第219次発掘調査

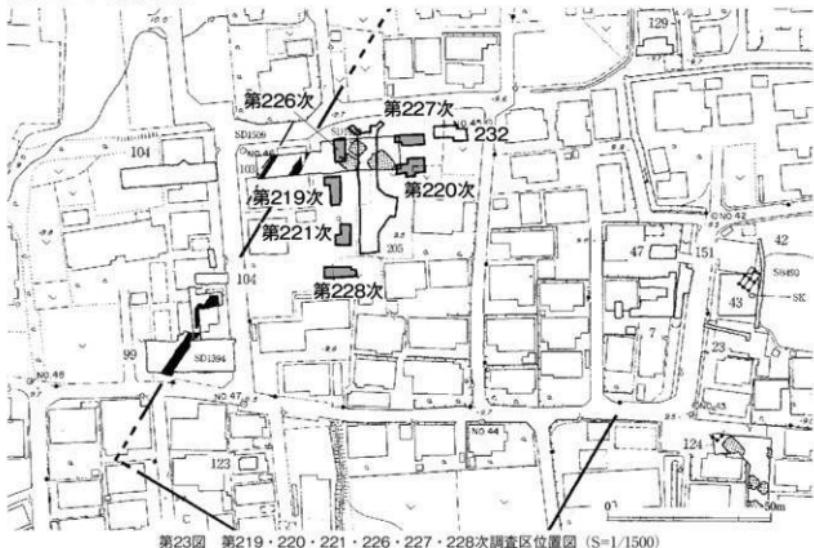
1. 調査経過と調査方法

第219次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成24年2月8日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年2月14日付H23教生文第106-366号で回答)に基づき実施した。調査地点は、郡山遺跡I期官衙の南西部にある(第2・23図)。

調査は平成24年3月5日に着手し、13日に終了した。同日に重機により埋め戻しを行った。調査区は、建物建築範囲内に東西3m、南北8.4mの規模で設定した。重機により、盛土及び旧耕作土であるⅠ層を除去し、基本層Ⅱ層上面で遺構検出作業を行った。調査区の北西部に遺構が検出され、この遺構の規模等を明らかにするため、調査区の北西部を西へ東西1.5m、南北2.2m拡張した。遺構の記録は、平面図・断面図を縮尺1/20を作成し、写真はデジタルカメラで撮影した。



第222図 第219次
調査区配置図 (S=1/400)



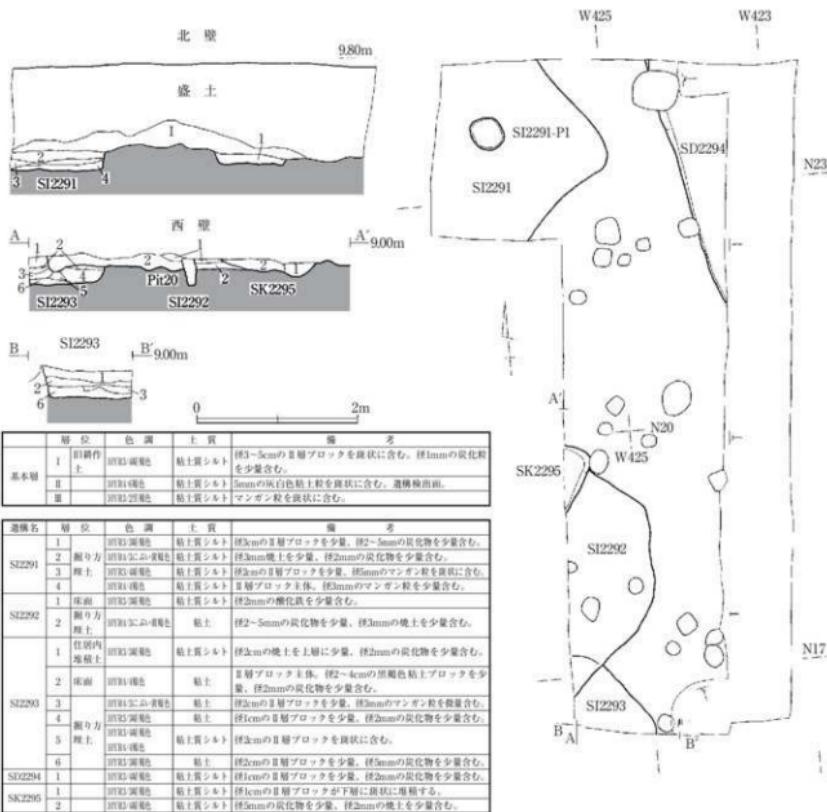
第23図 第219・220・221・226・227・228次調査区位置図 (S=1/1500)

2. 検出遺構と出土遺物

調査区内には、盛土が50~100cmあり、その下に旧耕作土であるⅠ層が最大40cm程の厚さで堆積している。遺構は、さらにその下の基本層Ⅱ層上面で検出した。遺構検出面までの深さは95~100cmである。

検出された遺構は、竪穴住居跡3軒、土坑1基、溝跡1条、ピット21基である。ここでは、検出された主な遺構について報告する。

【SI2291竪穴住居跡】調査区の北東部に位置する。検出されたのは竪穴住居跡の南東隅の一部である。規模は、北東辺で1.55m、南東辺で1.7mである。壁高は25cm程である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は4層に細分され、全てが掘り方埋土と考えられる。遺物は土師器片が少量出土した。



第24図 第219次調査区平・断面図 (S=1/60)

【SI2292堅穴住居跡】 調査区南部に位置する。平面形はややゆがんだ丸方形を呈する。検出長は北東辺で17m、南東辺で2.3mである。堆積土は褐色とびい黄褐色の粘土質シルトの2層に細分され、いずれも掘り方理土と考えられる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は20cm程である。SI2293堅穴住居跡、SK2295土坑とピットと重複し、SK2295土坑よりも古く、SI2293堅穴住居跡よりも新しい。

遺物は土師器片、須恵器片が少量出土している。

【SI2293堅穴住居跡】 調査区南部に位置する。検出されたのは北東辺の一部と考えられる。検出長は、北東辺で14mである。堆積土は暗褐色の粘土を中心に6層に細分され、全てが掘り方理土と考えられる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は40cm程である。SI2292

堅穴住居跡と重複し、これよりも古い。

遺物は、掘り方理土中から平底に近い丸部で、体部が短く立ち上がるC-I121土師器壺が



第25図 SI2293堅穴住居跡出土遺物

出土している。

【SD2294溝跡】調査区の北東部に位置する。検出長は3.15mで、上幅は90cm程、深さは10cm程である。断面形は浅いU字形を呈する。堆積土は暗褐色の粘土質シルトの単層で、基本層位第II層のブラックと炭化物粒が混入する。遺物は出土していない。

【SK2295土坑】調査区中央部に位置する。西側の大部分が調査区外に延びるため、全体は不明である。平面形は隅丸方形を呈するものと推定される。検出した規模は東西35cm程、南北80cm程で、深さは15cm程である。底面は比較的平坦である。堆積土は暗褐色の粘土質シルトを主体とし、2層に細分される。SI2292竪穴住居跡と重複しこれよりも新しい。周辺で検出されている竪穴住居跡とも方向が比較的近いことから竪穴住居跡の可能性がある。

遺物は、堆積土中から土師器片が少量出土している。

3.まとめ

第119次調査区では竪穴住居跡3軒が検出された。本調査区の東部に隣接する第206次調査区でも竪穴住居跡が多数検出されており、一連の住居群の一部であると考えられる。今回検出された竪穴住居跡の時期に関しては、時期を検討できる遺物等が出土していないため、詳細は不明である。



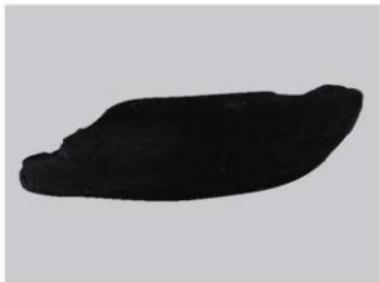
1. 調査区全景遺構完掘状況（北から）



2. SI2291完掘状況（北東から）

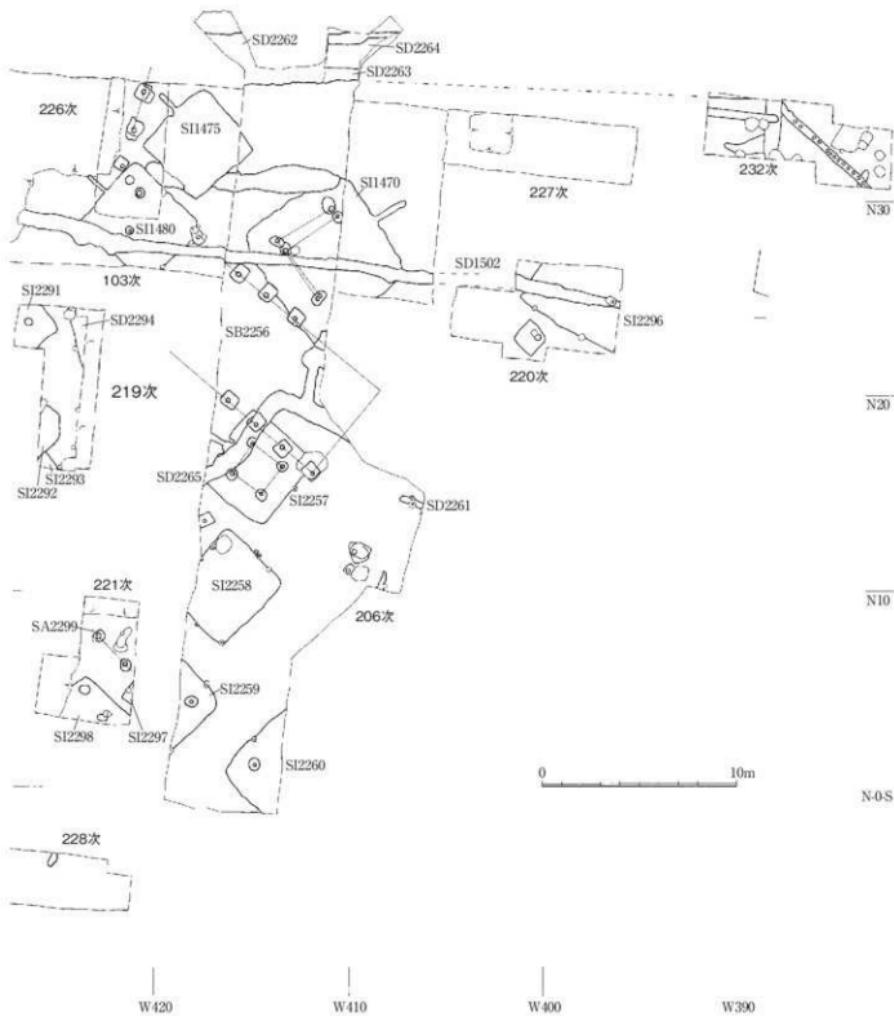


3. SI2293完掘状況（北東から）



4. C-1121 土師器坏

写真図版4 第219次調査区及び出土遺物



第26図 第103・206・219・220・221・226・227・228・232次調査区全体図 (S=1/250)

V. 第220次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第220次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成24年2月15日付で申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年2月27日付H23教生文第106-360号で回答)に基づき実施した。調査地点は遺跡南西部にある(第2・23図)。

調査は平成24年3月5日に着手し、19日に終了した。同日に重機により発生土で埋め戻しを行った。調査区は、建物建築範囲内の東寄りに南北3m、東西9mで設定した。重機により、盛土及び旧耕作土であるⅠ層を除去し、基本層Ⅱ層上面で遺構検出作業を行った。平面図、断面図は縮尺1/20で作成した。記録写真はデジタルカメラを用いて撮影した。

2. 検出遺構と出土遺物

調査区内には、盛土が60~95cmあり、その下に旧耕作土であるⅠ層が70~90cm程ある。遺構は、さらにその下で検出されたⅢ層上面で検出した。

検出された遺構は、竪穴住居跡1軒、溝跡1条、ピット25基である。ここでは、検出された主な遺構について報告する。

【SI2296竪穴住居跡】調査区北東側に位置する。上面のⅡ層により削平を受けている個所もある。平面形は不明であるが、隅丸方形を呈すると考えられる。検出長は南西辺で5.6m、北西辺で2.1mである。掘り方埋土の上面を床面としており、一部が硬化しているのが確認された。また遺構の北東隅には焼土粒の広がりと焼土のブロックが確



第27図 第220次
調査区配置図 (S=1/400)

W403

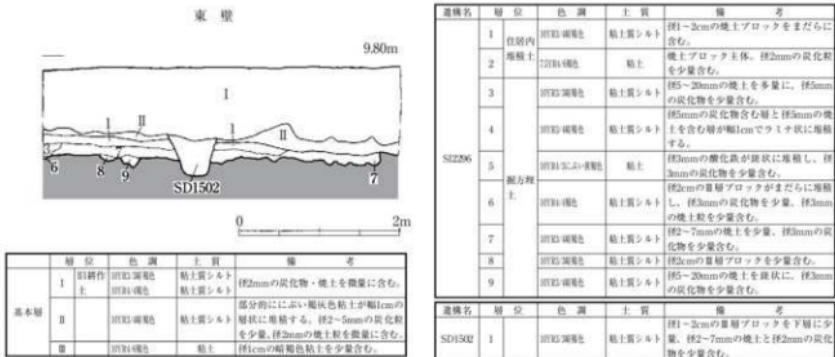
W400

N25

N23

0 2m

第28図 第220次調査区平面図 (S=1/60)



第29図 第220次調査区断面図 (S=1/60)

認された。床面上では4基のピットが検出された。A SI2296-P3 A'-8.60m 検出された位置から主柱穴になるかは不明である。
 SI2296-P4の底面からは、柱の基部となる木質部が出土した。堆積土は暗褐色と黒褐色の粘土質シルトを中心にして9層に細分され、1層が住居内堆積土、3~9層が掘り方理土である。SD1502溝跡とP1・P2・P14と重複し、これよりも古い。
 遺物は掘り方埋土中から、E-575須恵器蓋が出正在している。

【SD1502溝跡】調査区北側に位置する。II層上面から掘り込まれている。方向は東西方向で、東側と西側が調査区外に延びる。検出長は5.5m程で、上幅は70cm程、検出面からの深さは45cm程度である。断面形はU字形で、底面は比較的平坦である。堆積土は暗褐色の粘土質シルトの単層で、炭化物粒と焼土粒が少量混入し、基本層位第III層のプロックが下層に少量堆積する。SI2296堅穴住居跡と重複し、これより新しい。検出された位置から、第103・206次調査区で検出されているSD1502溝跡の延長と考えられる。

遺物は、C-1126土師高杯が出土している（第31図2）。

【ピット】調査区全体で25基検出された。検出面はIII層上面である。平面形は、円形、楕円形、隅丸方形を呈するものがある。P25は、掘り方の長辺が130cm程、短辺が120cm程で、平面形は隅丸方形を呈する。掘り方の中央よりやや東寄りで柱痕跡が検出されている。柱痕跡は直径30cm程で、深さは36cm程である。掘り方埋土は3層確認された。暗褐色と黄褐色の粘土質シルトで、一部の層は基本層位第III層のプロックを主体とし、炭化物粒、焼土粒



第30図 SI2296-P3・P4断面図 (S=1/60)



団体	登録 番号	種別	器形	出土地点	法量 (cm)	外面調整	内部調整	写真 図版
1 E-575		須恵器 蓋		SI2296 掘り方埋土	口径：(14.0) ロクロナデ		ロクロナデ	54
2 C-1126		土師器 高杯		SD1502 1層	口径：(17.4) 口縁部：ロコナデ 体部：手持ちケズリ		ミガキ。黒色処理	55

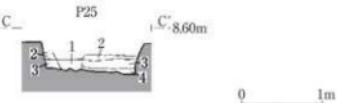
第31図 SI2296堅穴住居跡・SD1502溝跡出土遺物

などを少量含む。

遺物は、掘り方埋土中から土師器片が少量出土している。

3.まとめ

第220次調査では、堅穴住居跡1軒、溝跡1条、ピット25基が検出された。SI2296堅穴住居跡については、第206次調査区で検出されている堅穴住居跡と一連の遺構群であるものと考えられる(第26図)。時期については、検討できる遺物が出土していないため、詳細は不明である。SD1502溝跡については、検出位置から第103次・第206次調査区で検出されているSD1502溝跡の延長と考えることができ、さらに東に延びるものと考えられる。SI2296堅穴住居跡よりも新しい溝跡であるが、郡山官衙に関わる遺構であるかは不明である。ピットについては、P25の掘り方が一辺120cm以上と比較的大型である。現段階では隣接する他の調査区ではこれに対応する柱穴は検出されていない。第206次調査区では、I期官衙の時期と考えられるSB2256掘立柱建物跡が検出されていることから、この周辺で同様の建物跡が検出される可能性がある。今後、隣接する区域を調査する際に留意し、I期官衙の南西部付近の状況について検討を加えていく。



第32図 P25断面図 (S=1/60)



1. 調査区全景 遺構完掘状況
(西から)

2. 調査区東壁断面 (西から)

3. SI2296床面検出状況 (西から)



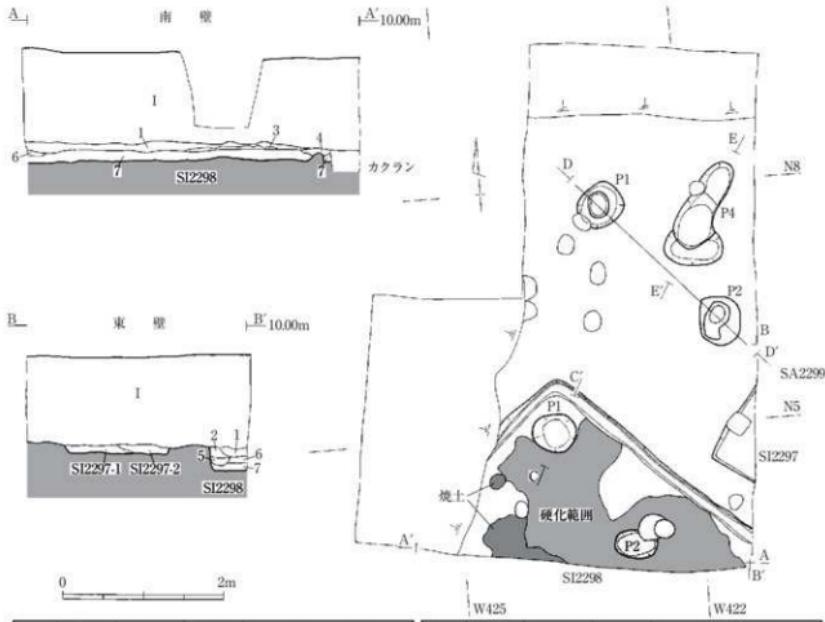
写真図版5 第220次調査区及び出土遺物

VI. 第221次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第221次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成24年2月15日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年2月27日付H23教生文第106-381号で回答)に基づき実施した。調査地点は、郡山市一期官衙の南西部にある(第2・23図)。

調査は平成24年3月5日に着手し、19日に終了した。調査終了後、重機により埋め戻しを行った。調査区は、建物建築範囲内に東西3m、南北6.5mの規模で設定した。重機により盛土及びⅢ層上面までを除去後、遺構検出作業を行った。南西側に豊穴住居跡と推測される遺構が検出された。この遺構の規模等を明らかにするため、調査区の南西側を南北3.1m×東西1.8mの範囲で拡張を行ったが、拡張した大部分は擾乱を受けていることが判明した。遺構の記録は平面図・断面図を縮尺1/20で作成し、写真はデジタルカメラを用いて撮影した。



第34図 第221次調査区・断面図 (S=1/60)

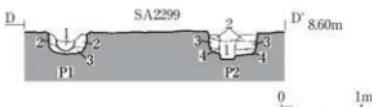
2. 検出遺構と出土遺物

調査区内には、旧耕作土であるⅠ層が1m程あり、遺構はその下で検出されたⅡ層上面で検出した。

検出された遺構は、一本柱列1条、竪穴住居跡2軒、ピット14基である。ここでは、主な遺構について報告する。

【SA2299一本柱列】 調査区北部で柱穴2基が検出された。方向はN50°Wである。いずれも柱が抜き取られていて考えられ、柱痕跡が残存していたのはP2のみである。P1とP2の柱間寸法は2.0m程である。P1の掘り方は長辺60cm程、短辺45cm程で、平面形は隅丸長方形を呈する。深さは26cm程である。中央に長辺35cm程、短辺25cm程、深さ22cm程の柱の抜取りを受けしており、柱痕跡は残存していない。掘り方理土は2層に細分され、いずれも暗褐色の粘土質シルトで、炭化物や酸化鉄を少量含んでいる。遺物は柱抜き取り穴と掘り方理土から土師器片が少量出土している。

P2の掘り方は、長辺60cm程、短辺50cm程で、平面形は隅丸方形を呈する。深さは26cm程である。中央に長辺50cm程、短辺30cm程、深さ12cm程の抜き取りを受けているが、柱痕跡は残存している。柱痕跡は円形で直径20~26cm、深さは32cm程である。掘り方理土は3層に細分され、暗褐色の粘土質シルトもしくは粘土で構成されている。遺物は掘り方理土から土師器片が少量出土している。



遺構名	層	位	色	調	土質	備考
SA2299 -P1	1	柱抜取 り	黄	II	粘土	伴1cmのくびれ状褐色粘土。伴2~5mmの炭化物。伴2mmの燒土をそれぞれ少量含む。
	2	掘り方 理土	黄	II	粘土質シルト	伴1cmの基層土を少量含み、伴2mmの炭化物を微量含む。
	3	理土	黄	II	粘土質シルト	伴1cmの基層土を底状に含み、伴2mmの炭化物を少量含む。
SA2299 -P2	1	柱痕跡	黄	II	粘土	伴2mmの理土を底状に含み、伴2mmの炭化物を微量含む。
	2		黄	II	粘土質シルト	伴1cmの理土を少量含み、伴2mmの炭化物を微量含む。
	3	掘り方 理土	黄	II	粘土質シルト	伴1cmの基層土を底状に含み、伴2mmの炭化物を微量含む。
	4		黄	II	粘土	伴1cmのくびれ状褐色粘土を底状に含み、伴2mmのマンガナイトを微量含む。

第35図 SA2299断面図 (S=1/60)

【SI2297竪穴住居跡】 調査区南部で検出された。遺構の東側は調査区外に延びる。平面形は隅丸方形を呈するものと推測される。検出した規模は、北西辺が1.1m程、南西辺が0.7m程である。堆積土は暗褐色の粘土もしくは粘土質シルトで2層に分層される。全てが掘り方理土と考えられる。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は10cm程である。検出された位置から、第206次調査の際に検出されたSI2297竪穴住居跡と同一の遺構である可能性がある。

遺物は、掘り方理土中から土師器片が少量出土している。

【SI2298竪穴住居跡】 調査区南部で検出された。南側が調査区外に延びる。遺構の西側は搅乱によって削平されている。主軸方向は北東~南西方向に振れ、平面形は隅丸方形を呈する。検出した規模は北東辺で3.2m程、北西辺で0.9m程である。床面は掘り方理土の上面で、大部分が硬化しているのが確認された。また遺構の南西隅に焼土の広がりが検出された。床面上では2基のピットを検出したが、柱穴となるかは不明である。堆積土は暗褐色と黒褐色の粘土質シルトを中心にして7層に細分され、1、2層が住居が廃棄されてからの堆積土、3、4層が機能時の堆積土、5層が周溝内堆積土、6、7層が掘り方理土である。周溝は北東壁と北西壁に沿って検出された。上幅は13~18cm、深さは10cm程で、断面形はU字形を呈する。周溝内堆積土は黒褐色の粘土質シルトで、炭化物が少量混入している。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、壁高は30cm程である。

遺物は、住居内堆積土中から体部外面にハケメ、内面にヘラナデ、口縁部にヨコナデを施し、口縁部が短く外傾するC-1128土師器甕（第36図1）や、体下部に段があり、体部から口縁部にかけて外反し、内面に黒色処理が施されたC-1129土師器甕（第36図2）の破片が出土している。



図版番号	登録番号	種別	器形	出土地点	法量(cm)	外面調整	内面調整	写真図版
1	C-1128	土師器	甕	SI2298 住居内埋植土	口径：(12.4)	口縁部：ヨコナデ 体部：ハケメ	口縁部：ヨコナデ 体部：ヘラナデ	65
2	C-1129	土師器	甕	SI2298 住居内埋植土	口径：(13.2)	口縁部：ヨコナデ 体部：手持ちケズリ	ミガキ 黒色処理	66

第36図 SI2298出土遺物

3.まとめ

今回の調査では、一本柱列1条、堅穴住居跡2軒、ピット14基が検出された。

SA2299一本柱列は、時期を検討できる遺物は出土していないが、柱列の方向からI期官衙の時期の遺構の可能性が考えられる。さらに、本調査区外で関連する柱穴が検出される可能性もあり、建物跡となることも考えられる。周辺では、第206次調査区でI期官衙の時期に属するSB2256掘立柱建物跡が検出されていることからも、I期官衙の時期の一連の遺構になる可能性があり、近隣の調査によって検討を重ねていく必要がある（第26図）。SI2297堅穴住居跡は、検出された位置から、第206次調査の際に検出されたSI2259堅穴住居跡と同一の遺構である可能性がある。



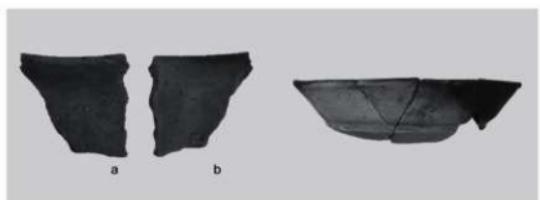
1. 調査区全景（南から）

2. SA2299-P1断面（南西から）

3. SA2299-P2断面（南西から）



4. SI2298床面検出状況（北西から）



5. C-1128土師器甕

6. C-1129土師器甕

写真図版6 第221次調査区及び出土遺物

VII. 第222次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第222次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成24年4月9日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年4月20日付H24教生文第122-16号で回答)に基づき実施した。調査地点は、遺跡東部に位置する。第152次調査区で検出された郡山1期官衙東辺と考えられる材木列の延長線上に位置することから、その関連遺構が検出されることが予想された(第38図)。

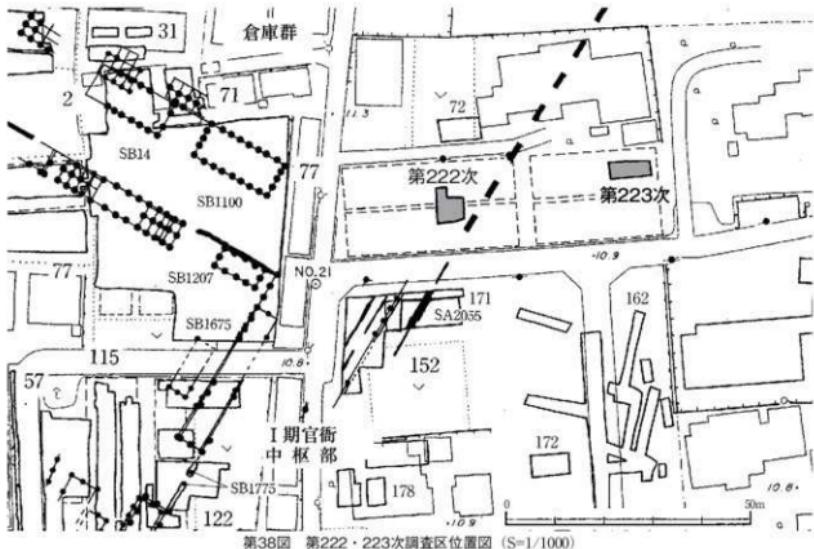
調査は平成24年5月16日に着手し、24日に終了した。調査区は、建物建築範囲内に東西5m、南北4.5mの規模で設定した。重機により盛土及びI層を除去し、基本層II層上面で遺構検出作業を行った。調査区北部で検出された遺構の規模等を明らかにするため、調査区の北西隅を北へ2.0m、幅1.5m拡張し、遺構の検出を行った。拡張区で検出された遺構は、掘り込み等を行わず、平面での記録に留めた。遺構の記録は、平面図・断面図を縮尺1/20で作成し、写真はデジタルカメラで撮影した。

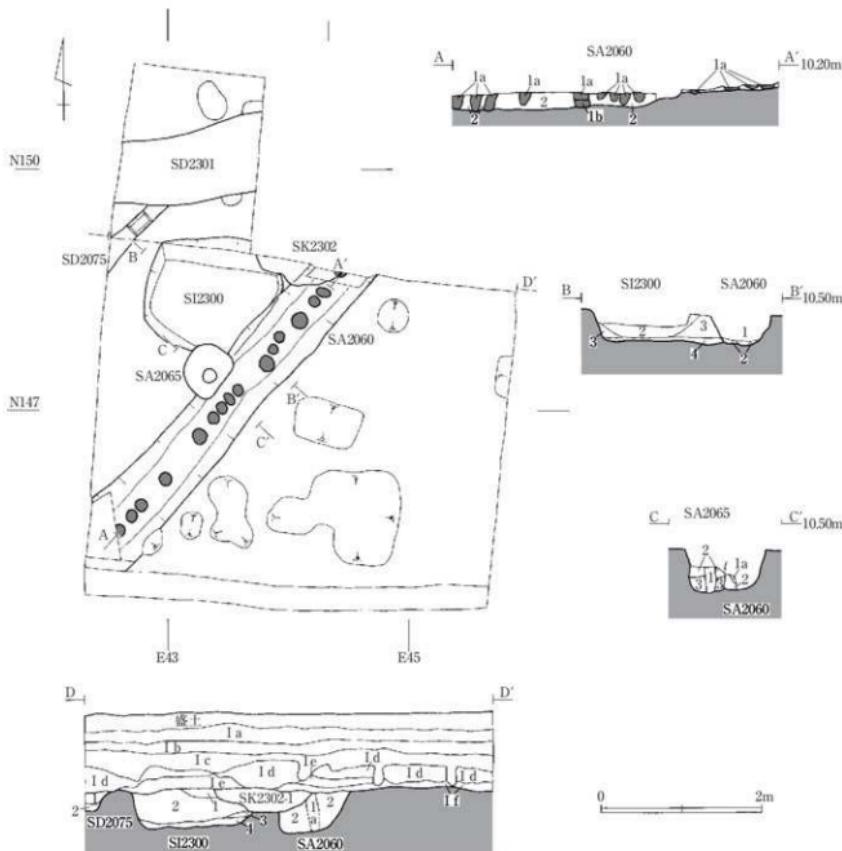


2. 検出遺構と出土遺物

調査区内には、盛土が20cm程あり、その下に旧耕作土であるI層が40cm程の厚さで堆積している。遺構はその下のII層上面で検出した。遺構検出面までの深さは100cm程である。

検出された遺構は、材木列1条、一本柱列の柱穴1基、竪穴遺構1基、溝跡2条、土坑1基、ピット3基である。ここでは、検出された主な遺構について報告する。





層位	色調	土質	備考	
			砂	泥
1a	SD2301	シルト	砂に均等に含む。	
1b	SD2075	シルト	均等に含む。	
1c	SD2075	シルト	風砂を若干含む。	
1d	SD2075	粘土質シルト	風砂を多く含む。ガラス片を含む。	
1e	SD2301	粘土質シルト	風砂を含む。	
1f	SD2301	粘土質	ガラス片を含む。	
B	SD2075	粘土質	均質。上部に漸進的な変化が認められる。	

地帯名	層位	色調	土質	備考
SA2060	1a	0.05-10.25m 黄褐色	粘土	II型を粒状に若干含む。I型付近。
	1b	0.05-10.25m 黄褐色	粘土	II型を小プロックに若干含む。
	2	0.05-10.25m 黄褐色 0.05-2.6m 黄褐色	粘土質シルト 粘土	II型プロックを多く含む。
SI2300	1	0.05-10.25m 黄褐色	粘土質シルト	II型小プロックを少量。炭化物鉱を二つ含む。
	2	0.05-10.25m 黄褐色	粘土	III型を多く含む。II型プロックを多く、黒褐色土質シルトプロックを若干含む。
SD2075	1	0.05-10.25m 黄褐色	粘土質シルト	Ⅲ型を含む。炭化物鉱をごく少含む。
	2	0.05-10.25m 黄褐色	粘土質シルト	II型小プロックを若干含む。
SK2302	1	0.05-10.25m 黄褐色	粘土質シルト	II型をごく少含む。
	2	0.05-10.25m 黄褐色	粘土質シルト	炭化物鉱、II型を含む。
SA2065	1	0.05-10.25m 黄褐色	粘土質シルト	II型プロックを含む。
	2	0.05-10.25m 黄褐色	粘土質シルト	II型プロックを若干含む。

第39図 第222次平・断面図 (S=1/60)

【SA2060材木列】 調査区西部に位置する。検出長は5.40mで、方向は、N-32°Eである。掘り方の規模は、上幅70~95cm程、下幅35~45cm程、深さは40~50cmである。断面形は逆台形を呈し、壁は底面から急に立ち上がる。掘り方の底面は、ほぼ平坦である。掘り方埋土は黒褐色粘土質シルトと灰黄褐色粘土の混合土で、基本層第Ⅱ層を由来とする黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む。柱痕跡は16箇所検出した。直径15~20cm程の円形を呈する。堆積土は、しまりのあまりない黒褐色および暗褐色の粘土である。SI2300竪穴遺構、SK2302土坑、SA2065一本柱列の柱穴と重複し、SK2302土坑及びSA2065一本柱列の柱穴よりも古く、SI2300竪穴遺構よりも新しい。第152次調査で検出されているI期官衙中枢部の東部を区画するSA2060材木列の延長と考えられる。

遺物は、土師器片がごく少量出土した。

【SA2065一本柱列】 調査区西部に位置する。掘り方の規模は、長軸60cm程、短軸55cm程で、深さは50cmである。平面形は隅丸方形を呈する。掘り方埋土は、基本層第Ⅱ層を由来とする黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む暗褐色の粘土質シルトである。柱痕跡は掘り方のほぼ中央に位置し、直径15cm程の円形を呈する。SA2060材木跡、SI2300竪穴遺構と重複し、いずれよりも新しい。

遺物は出土していない。

【SI2300竪穴遺構】 調査区北部に位置する。平面形は不明であるが、梢円形もしくは隅丸長方形を呈するものと推測される。規模は、長軸1.65m程、短軸1.4m程である。壁高は、30~35cm程で、壁の立ち上がりは急である。堆積土は3層に細別され、炭化物や基本層第Ⅱ層を由来とする黄褐色粘土質シルトのブロック状などを含む暗褐色粘土質シルトを主体とする。4層は掘り方埋土で、上層の堆積と同じく基本層第Ⅱ層を由来とする黄褐色粘土質シルトをブロック状に含む灰黄褐色のシルトである。床面は比較的の平坦で、4層上面を床面としている。床面上でピットなどは検出されていない。SA2060材木跡、SA2065一本柱列、SK2302土坑と重複し、いずれよりも古い。

遺物は、床面直上層からC-1136土師器坏、床面からC-1134土師器坏が出土している。C-1136土師器坏（第40図2）は、口縁部がわずかに外反する平底な有段丸底の坏である。C-1134土師器坏（第40図1）は平底気味の丸底の底部で、底部と体部の境を手持ちケズリによって作り出している。体部外面は手持ちケズリ、内面にミガキと黒色処理が施されている。これらの他に、床面からの出土遺物には、有段丸底のC-1132土師器坏片（写真図版7-7）や、体部外面に手持ちケズリを施し、口縁部をヨコナデで仕上げたC-1133土師器片（写真図版7-11）、色調が橙色で口縁端部が短く直立し、半球形を呈するC-1135土師器坏片（写真図版7-10）がある。

【SD2075溝跡】 調査区北西部に位置する。検出長は1.15mで、規模は上幅20~25cm程、下幅10~15cm程で、深さは10~22cm程である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は2層に細別され、炭化物や基本層第Ⅱ層を由来とする黄褐色粘土質シルトを粒状及び小ブロック状に含む暗褐色の粘土質シルトである。SD2301溝跡と重複し、これよりも古い。

遺物は出土していない。

【SD2301溝跡】 調査区拡張部に位置する。方向は東西方向である。検出長は1.8m程である。SD2075溝跡と重複し、いずれよりも新しい。一部拡張して検出したが、詳細は不明である。



図版番号	登録番号	種別	基點	出土地点	法量(cm)	外面調整	内面調整	写真版
1	C-1134	土師器	环	SI2300	床面 11.8~12.6 基高: 3.3	口縁部: ヨコナデ 体部: 手持ちケズリ	ミガキ 黒色処理	7-8
2	C-1136	土師器	环	SI2300	床面 13.8~13.65 基高: 4.05	口縁部: ヨコナデ 体部: 手持ちケズリ	ミガキ 黒色処理	7-9

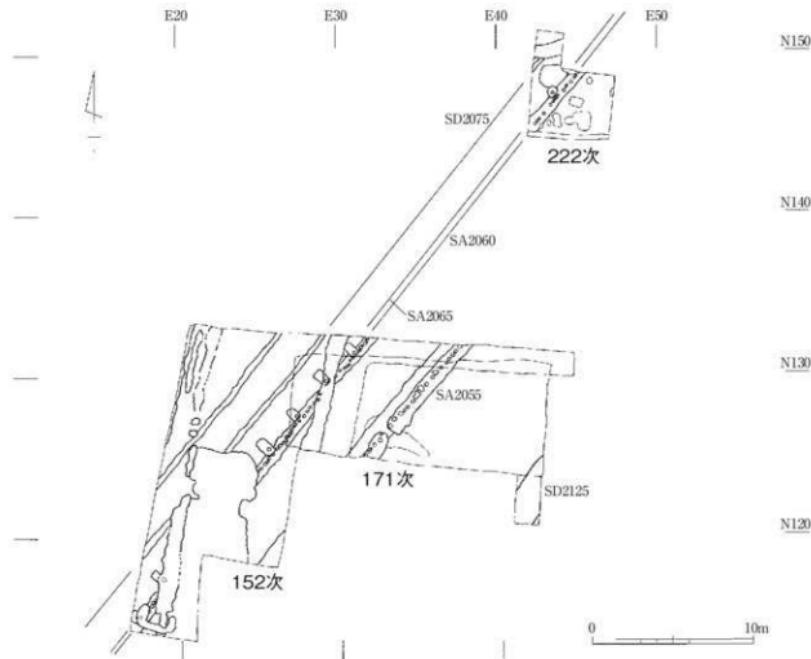
第40図 SI2300出土遺物

【SK2302土坑】調査区北壁の中央部に位置する。平面形は円形もしくは梢円形を呈するものと推測される。検出した規模は、東西125m程、南北30cmで、深さは30cm程である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は単層で、基本層第Ⅱ層を由来とする黄褐色粘土質シルトを粒状に含むにぶい黄褐色の粘土質シルトである。SA2060材木列、SI2300竪穴遺構と重複し、いずれよりも新しい。

遺物は出土していない。

3.まとめ

今回の調査では、材木列1条、一本柱列の柱穴1基、竪穴遺構1基、溝跡2条、土坑1基、ピット3基が検出された。これらの遺構のうち、材木列や一本柱列は、第152次調査区で検出されているSA2060材木列、SA2065一本柱列の延長とみられ、いずれもⅠ期官衙の遺構となると考えられる。調査区北西部で検出されたSD2301溝跡については、Ⅰ期官衙の時期の溝跡と考えられるSD2075溝跡よりも新しい遺構であるが、検出に留めているため、詳細は不明である。



第41図 第152・171・222団合成図 (S=1/300)



1. 調査区全景（東から）



2. SA2060柱痕跡検出状況（南西から）



3. SA2060中央部縦断面（東から）



4. SA2060断面（南西から）



5. SA2060・SA2065断面（南から）



6. SI2300豎穴造構床面検出状況（南から）



7. C-1132土師器坏



8. C-1134土師器坏

9. C-1136土師器坏

10. C-1135土師器坏



11. C-1133土師器壞

写真図版 7 第222次調査区及び出土遺物

IX. 第223次発掘調査

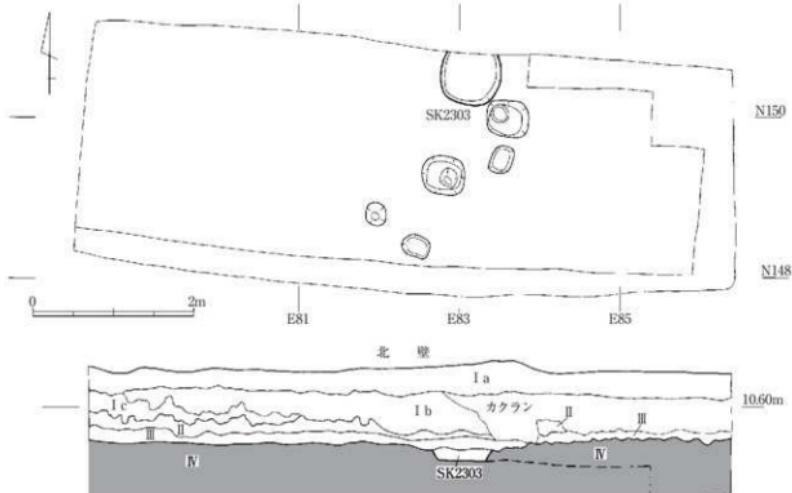
1. 調査経過と調査方法

第223次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成24年4月17日付け申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年5月2日付けH24教生文第122-33号で回答)に基づき実施した。調査地点は、一期官衙を区画する材木列と一本柱列が検出されている第222次調査区から東へ約20mに位置する(第2・38回)。

調査は平成24年6月18日に着手し、26日に終了した。調査終了後は、重機により埋め戻しを行った。調査区は、建物建築範囲内に東西3.0m、南北2.0mの規模で設定した。重機により盛土及びI層を除去後、基本層IV層上面で遺構検出作業を行った。基本層IV層上面での調査終了後、調査区南東隅に下層の調査のため調査区を設定し、下層の基本層の堆積状況を確認した。遺構の記録は、平面図・断面図を縮尺1/20で作成し、写真はデジタルカメラで撮影した。

2. 検出遺構と出土遺物

調査区内には、旧耕作土であるI層が60cm程の厚さで堆積している。I層は、近年の旧耕作土も含めて3層に細分される。その下には、褐色シルトの基本層II層が最大で20cm堆積しており、さらに下には黒色粘土質シルトの基本層位のIII層が最大で20cm堆積している。遺構は、第III層の下のIV層上面で検出した。



第43図 第223次調査区平・北壁断面図 (S=1/60)

現地表面から遺構検出面であるⅣ層までの深さは80cm程である。

検出した遺構は、土坑1基、ピット5基である。

【SK2303土坑】調査区中央部に位置する。全体の平面形は不明であるが、円形を呈するものと推測される。検出した規模は、直径75cm程で、検出面からの深さは14cm程である。断面形は逆台形を呈する。堆積土は暗褐色粘土質シルトの単層である。

遺物は出土していない。

【ピット】調査区中央部で5基検出した。平面形は円形あるいは隅丸方形を呈しており、直径は23~53cm程、深さは9~19cm程である。堆積土は、黒褐色または暗褐色の粘土質シルトである。いずれも単層であり、柱痕跡は確認されていない。

各ピットの堆積土中から土師器片が少量出土した。

【その他の出土遺物】1層中からE-577須恵器壺の体部片が出土した(写真図版8-3)。体部と肩部に鋭い棱がある。底部には高台が付き、その断面形は方形を呈する。色調は灰色で、焼成状況は非常に良好なものである。

3.まとめ

第223次調査では、土坑1基、ピット5基を検出した。調査地点は、I期官衙の東辺の一部と考えられる材木列を検出した第222次調査区から約40m東にある。SK2303土坑の時期等は不明である。ピットは、検出状況や規模から、建物跡等になる可能性は低く、官衙に関わる遺構ではないと考えられる。



1. 調査区全景（東から）



2. 北壁断面（南から）



3. E-577須恵器長頸壺

写真図版8 第223次調査区及び出土遺物

IX. 第225次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

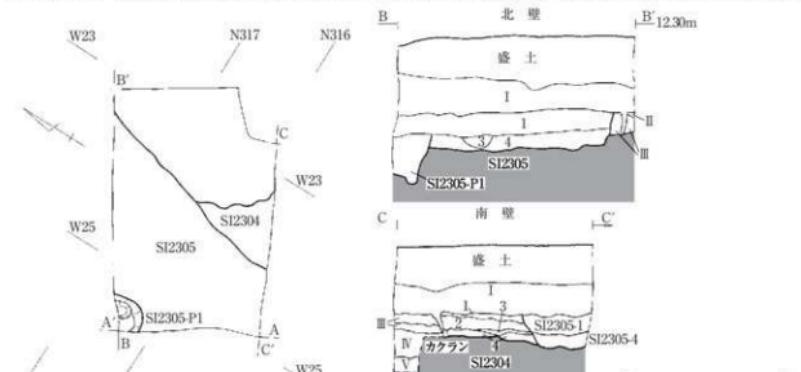
第225次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成24年6月18日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年6月20日付けH24教生文第122-99号で回答)に基づき実施した。調査地点は、Ⅰ期官衙の北部に位置する(第2・12図)。

調査は、平成24年7月2日から実施し、4日に調査を終了した。調査終了後、重機により埋め戻しを行った。調査区は、建物建築範囲内に東西3.0m、南北2.0mの規模で設定した。重機により盛土及びⅠ層を除去後、Ⅳ層上面で遺構検出作業を行った。遺構の調査終了後、調査区南東隅に50cm四方の深掘り区を設定し、下層の状況を確認した。遺構の記録は、平面図・断面図を縮尺1/20で作成し、写真はデジタルカメラで撮影した。



2. 検出遺構と出土遺物

調査区内には、盛土が約50~60cmあり、その下に旧耕作土で黒褐色粘土質シルトのⅠ層が50~60cmの厚さで堆積している。さらにその下で暗褐色シルトの基本層Ⅱ層が最大で30cm程あり、その下に黒褐色粘土質シルトの基本層Ⅲ層が最大で20cm程の厚さで堆積している。遺構は、さらにその下の黄褐色粘土質シルトの基本層Ⅳ層で検出した。なお、遺構検出作業はⅣ層上面で行ったが、土層断面の観察の結果、遺構はⅡ層またはⅢ層上面から掘り



層位	色調	土質	備考
I	暗褐色	粘土質シルト	ごく細かい懐化鉄を少量含む。
II	暗褐色	シルト	1cmの褐色・黒褐色シルトを少量含む。
III	暗褐色	粘土質シルト	1cmの黄褐色シルトをごく少量含む。
IV	暗褐色	粘土質シルト	
V	暗褐色	砂質シルト	

遺構名	層位	色調	土質	備考
SI2304	1 住居内堆积上	暗褐色	粘土質シルト	
	2 住居内堆积上	暗褐色	粘土質シルト	1cmの灰層上と炭化物を多量に含む。
	3 橋脚堆积上	暗褐色	シルト	1cmの炭化物と焼土を多量に含む。
	4 壁脚上	暗褐色	シルト	1cm~3cmの灰層上を多量に含む。
SI2305	1 住居内堆积上	暗褐色	シルト	炭化物をごく少量含む。
	2 橋脚堆积上	暗褐色	シルト	1cmの黄褐色シルトを少量含む。
	3 住居内堆积上	暗褐色	シルト	
	4 壁脚上	暗褐色	シルト	1cmの灰層上と炭化物を多量に含む。
SI2305-1	1	暗褐色	粘土質シルト	1cmの灰層上と炭化物を多量に含む。

第45図 第225次調査区・断面図 (S=1/60)

込まれていることが明らかとなった。

検出された遺構は、竪穴住居跡2軒である。

【SI2304竪穴住居跡】調査区東部に位置する。住居跡の掘り方の一部を検出した。部分的な検出であるため、平面形や規模は不明である。堆積土は3層に細分され、1、2層は住居内堆積土、3層は焼土と炭化物を多く含む住居の機能時の堆積土である。4層は掘り方理土である。4層上面を床面としている。SI2305竪穴住居跡と重複し、それよりも古い。

出土遺物は、堆積土1層から低平で有段丸底のC-1137土師器壺（写真図版9-2）が出土している。

【SI2305竪穴住居跡】調査区西部に位置する。部分的な検出のため、平面形や規模は不明である。住居の東辺の一部とみられる2.7m程を検出した。堆積土は3層に細分され、1層は住居内堆積土、2、3層は住居の機能時の堆積土である。4層は掘り方理土である。壁高は、調査区壁断面で20cm程である。掘り方理土の上面を床面としている。床面上でビットを1基検出した。SI2305-P1は調査区北西隅に位置しており、全体の平面形や規模は不明である。検出面からの深さは約60cmで、調査区内では柱痕跡は検出されなかった。SI2304竪穴住居跡と重複しており、SI2304竪穴住居跡よりも新しい。

遺物は、掘り方理土中から土師器片が少量出土している。

3.まとめ

第225次調査では、竪穴住居跡を2軒検出した。竪穴住居跡はいずれも部分的な検出で、全体を把握することはできなかった。本調査区周辺では、第19次調査区ではⅠ期官衙前半頃の竪穴住居跡を検出している。第217次調査区は7世紀中頃から後半頃の関東系の土師器甕が出土しているSI2288竪穴住居跡が検出されている。これらのことから、この周辺はⅠ期官衙の時期に竪穴住居群が密に分布していた可能性が推定でき、今回検出された2軒の竪穴住居についても住居群の一部となる可能性が推測される。



1. 調査区全景（西から）



2. C-1137土師器壺

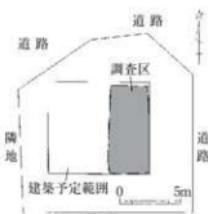
写真図版9 第225次調査区及び出土遺物

IX. 第226次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第226次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成24年5月24日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年6月6日付けH24教生文第122-72号で回答)に基づき実施した。調査地点は、I期官衙の南西部にあたり、平成6年度に国庫補助事業により実施した第103次調査区と一部重複し、平成23年度に宅地造成工事に伴い調査した第206次調査区の北西部に位置する(第23・26図)。

調査は平成24年7月17日に着手し、26日に調査を終了した。調査終了後、重機により埋め戻しを行った。調査区は建物建築範囲の東半部に東西3m、南北7mの規模で設定した。重機により盛土及び第103次調査時の埋め戻し土を除去し、遺構検作業を行った。遺構の記録は、平面図・断面図を縮尺1/20で作成し、写真はフィルムカメラとデジタルカメラで撮影した。



第46図 第226次調査区位置図
(S=1/400)

2. 検出遺構と出土遺物

調査区内には盛土が80cmあり、その下に第103次調査時の埋め戻し土が8~40cmある。埋め戻し土の直下が遺構検出面である。遺構が検出される黄褐色粘土質シルト層は、第206次調査区の基本層位第Ⅲ層に対応する。遺構検出面までの深さは、現地表面から80~90cmである。

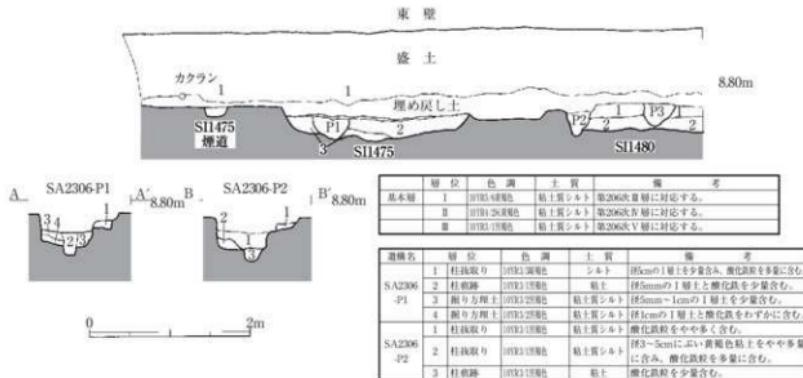
なお、遺構検出面より下層の調査は行っていないが、遺構の壁または底面で粘性の強い灰黃褐色粘土質シルトと、さらにその下でしまりの強い黒褐色粘土質シルトが確認された。これらの層は、第206次調査区の基本層序第Ⅳ層と第Ⅴ層に対応する。

今回の調査では、I層上面で柱列1列、竪穴住居跡2軒、柱穴1基、ピット9基を検出した。

【SA2306柱列】調査区北部に位置する。柱間寸法は210cmである。方向はN:9°-Eである。SA2306-P1の掘り方は、一辺が60~65cm程の隅丸方形を呈しており、深さは40cm程である。柱痕跡は直径20~25cm程で、梢円形を呈している。不整形の柱取り穴が認められる。SA2306-P2の掘り方は、柱取り穴によって壊されており、平面形は不整円形を呈し、深さは45cm程である。柱痕跡は直径25cm程で、円形を呈している。不整形の柱抜き取り穴が認められる。調査区西部は擾乱により遺構が削平されており、全体の様相は不明であるが、遺構の検出状況から、SA2306-P2が掘立柱建物跡の南東隅柱となる可能性がある。



第47図 第226次調査区平面図 (S=1/60)



第48図 東壁・SA2306断面図 (S=1/60)

遺物は、P1・2の掘り方理土中から土師器片が少量出土した。

[SI1475堅穴住居跡] 調査区の北東部に位置する。第103次調査区では造構全体を検出し、床面までの調査を行っている。ここでは今回検出した範囲での報告とする。住居跡の北西辺の一部を1.9m、南西辺の一部を1.24m検出した。堆積土1層は部分的に検出された褐灰色シルト層で、住居の機能時の堆積土と考えられる。2、3層は掘り方理土である。煙道は北西壁に敷設されている。調査区東壁から56cm程検出した。上幅25cm程、深さは10cm程である。

遺物は、煙道内堆積土から土師器片が出土した。

[SI1480堅穴住居跡] 調査区の南部に位置する。第103次調査で造構全体を検出している。本調査では住居跡の北東辺の一部を1.9m、北西辺の一部を3.0m、煙道の一部を検出した。平面形は方形を呈する。住居内堆積土は1層で、2層は掘り方理土である。壁は底面から垂直に立ち上がり、壁高は10cm程である。2層上面を床面とする。床面には、部分的に炭化物と焼土が分布している。煙道とカマドは北西辺に敷設される。煙道は住居跡北西辺から1.1m程検出し、上幅15cm程、深さは5cm程である。カマドの袖は失われており、カマド右袖の基底部範囲に被熱の痕跡が検出された。床面上では2基のピットを検出した。P1の掘り方は直径50cm程で、平面形は円形を呈し、深さは45cm程である。主柱穴の可能性がある。P2の掘り方は直径40cm程で、平面形は円形を呈し、深さは20cm程である。堆積土上層には、灰白色を呈した粘土塊が堆積していた。

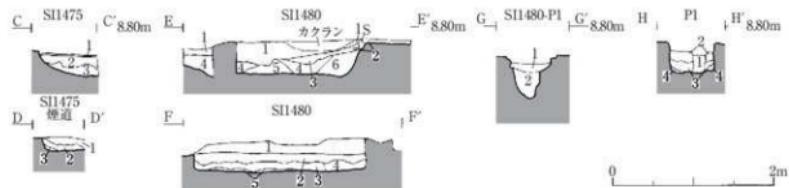
遺物は住居内堆積土から土師器片などが出土地。

[P1] 調査区中央部で検出した。掘り方の規模は一辺60cm程で、平面形は方形を呈する。検出面からの深さは40cm程である。掘り方理土は3層に細分される。柱痕跡は、直径20cm程の円形である。調査区内では、この柱穴に対応する造構は検出されなかった。

遺物は、掘り方理土から土師器片が少量出土した。

3.まとめ

第226次調査では、柱列1列、堅穴住居跡2軒、柱穴1基を検出した。SA2306柱列は、掘立柱建物跡となる可能性がある柱列である。本調査区周辺では、第206次調査区でSB2256掘立柱建物跡が検出されているが、SA2306柱列とは柱筋の方向が異なる。SA2306柱列の時期や、SB2256掘立柱建物跡との関連については、隣接地での調査成果の蓄積によって検討していくこととする。



地盤名	層 位	色 調	土 実	備 考
SI1475	1 機械耕 用粘土	灰褐色(11-7/8)	粘土質シート	
	2 振り方 泥炭	泥炭色(2/8)	粘土質シート	
	3 地上 泥炭	泥炭色(3/8)	H1cmの1層上をやや多量に含む。	
SI1475	1	灰褐色(7/8)	粘土質シート	H5mmの1層上をやや多量に含む。
	2 標高内 堆積土	H10cm	H5mmの1層上を多く含む。	
	3 堆積土	H20cm	H5mmの1層上を少量化。	
SI1480	1	灰褐色(7/8)	粘土質シート	H5mmの1層上を少量化。
	2 標高内 堆積土	H10cm	粘土質シートを少量化。	
	3 堆積土	H20cm	H5mmの1層上を多く含む。	
P1	1 桁軌跡 地盤内	H10cm	粘土質シート	H5mmの1層上を少量化。
	2 標高内 堆積土	H10cm	粘土質シート	H5mmの1層上を少量化。
	3 堆積土	H20cm	粘土質シート	H5mmの1層上を少量化。
	4	泥炭	粘土質シート	H5mmの1層上を少量化。

第49図 SI1475・1480・P1断面図 (S=1/60)



1. 調査区全景（北から）



3. SA2306-P2柱抜き取り断面（西から）



4. SI1480床面検出状況（南東から）



2. SA2306-P1断面（南から）



5. P1断面（西から）

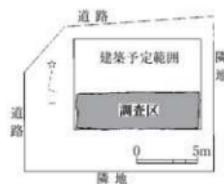
写真図版10 第226次調査区

X. 第227次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第227次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成24年5月31日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年6月6日付けH24教文第122-79号で回答)に基づき実施した。調査地点は、平成23年度に宅地造成工事に伴い調査した第206次調査区の北東部にある(第26図)。

調査は平成24年7月17日に着手し8月1日に重機により埋め戻しを行い、調査を終了した。調査区は、建物建築範囲内に東西10m、南北3mの規模で設定した。重機により盛土及びⅠ層を除去し、Ⅱ層上面で遺構検出作業を行なった。遺構の記録は平面図・断面図を縮尺1/20で作成し、写真はデジタルカメラで撮影した。



第50図 第227次調査区配置図
(S=1/400)

2. 検出遺構と出土遺物

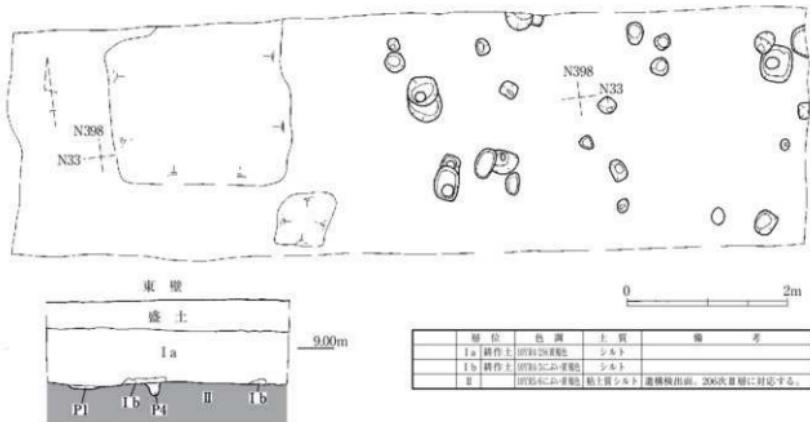
調査区には盛土が30~40cmあり、その下に耕作土であるⅠ層が60~70cmある。さらにその下のⅡ層上面が遺構検出面である。遺構検出面の現地表面からの深さは、90~100cmである。

調査区の西半部には、Ⅰ層から掘り込まれた擾乱がⅡ層まで及んでおり、遺構が削平されている状況であった。遺構は調査区の東半部でピットを27基検出した。平面形は、円形、楕円形、隅丸方形など様々である。また、規模や遺構の深さも様々で一定していない。柱痕跡が検出されたものもあるが、建物を構成するのかは不明である。

遺物は、各ピットの堆積土中から土師器片が少量ずつ出土している。

3. まとめ

第227次調査では、官衙に関わる遺構は検出されなかった。本調査区に近接する第206次調査区では、郡山Ⅰ、Ⅱ期官衙の時期の竪穴住居跡や、Ⅰ期官衙を構成すると考えられる掘立柱建物跡が集中して検出されている(第26図)。この周辺の遺構の分布については、さらに近隣の調査成果を踏まえて検討していく必要がある。



第51図 第227次調査区平・断面図 (S=1/60)

IX. 第228次発掘調査

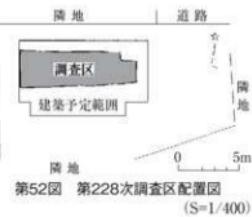
1. 調査経過と調査方法

第228次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成24年6月15日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年6月20日付けH24教生文第122-97号で回答)に基づき実施した。調査地点は、第206次調査区の南端部にある(第23・26図)。

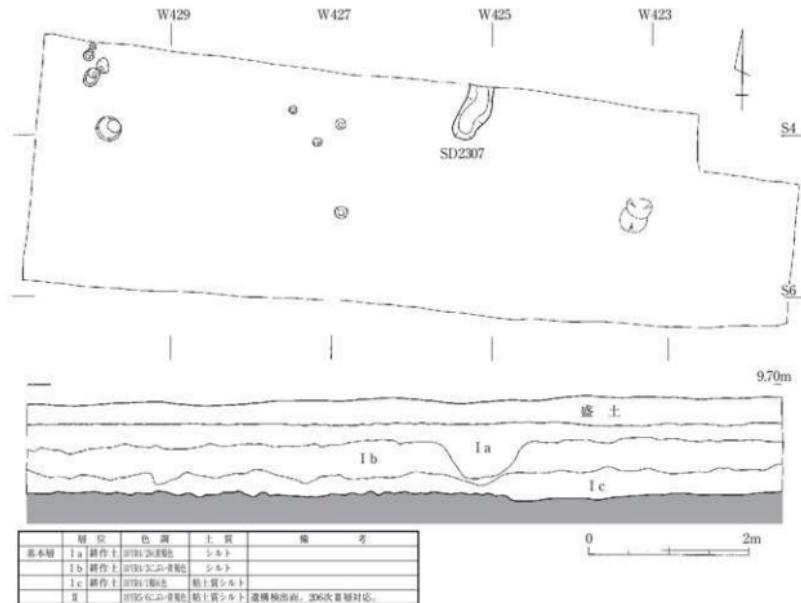
調査は平成24年8月20日から実施し8月27日に調査を終了し、重機により埋め戻しを行った。調査区は、建物建築範囲内に東西10.0m、南北3.0mの規模で設定した。重機により盛土及びI層を除去し、II層上面で遺構検出手作業を行った。遺構の記録は平面図・断面図は縮尺1/20で作成し、写真是デジタルカメラで撮影した。

2. 検出遺構と出土遺物

調査区には盛土が20~40cmあり、その下に耕作土であるI層がある。I層は3層に細分される。灰黄褐色シルトのIa層が16~70cm、にぶい黄褐色シルトのIb層が2~24cm、褐色粘土質シルトのIc層が10~35cmである。Ic層は土質から水田耕作土の可能性がある。遺構検出手は、さらにその下の基本層位II層上面である。II層は黄褐色粘土質シルトで、第206次調査区の基本層序III層に対応する。



第52図 第228次調査区配置図
(S=1/400)



第53図 第228次調査区平・断面図 (S=1/60)

遺構検出面の現地表面からの深さは90~120cmである。

今回の調査では、溝跡1条、ピット9基を検出した。遺物は、Ic層から土師器片が少量出土した。

【SD2307溝跡】調査区中央の北壁際で検出した南北方向の溝跡である。検出長は70cm程で、調査区外へ延びるものと考えられる。規模は、上幅30cm程、下幅15cm程、深さ10cm程である。断面形はU字形を呈する。

遺物は出土していない。

3.まとめ

第227次調査では、官衙に関わる遺構は検出されなかった。本調査区に近接する第206次調査区では、郡山I・II期官衙の時期の竪穴住居跡や、I期官衙を構成すると考えられる掘立柱建物跡が集中して検出されている（第26図）。I期官衙の南西部の様相については、今年度調査を実施した第219・220・221・226・227・228次調査区の成果を踏まえ、また周辺の調査の中で検討していく。



1. 調査区遺構完掘状況全景（東から）



2. 調査区南壁断面（北から）

写真図版11 第228次調査区

X III. 第229次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第229次調査は、平成24年7月6日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年7月13日付けH24教生文第122-130号で回答)に基づき実施した。調査地点は、郡山遺跡の北西部にある。当調査地点から東へ約90mの地点で実施した第148次調査ではⅡ期官衙北辺材木列であるSA616材木列が検出されており、当調査地点ではその延長部が検出されることが想定された。



第54図 第229次調査区配置図 (S=1/400)

調査は平成24年9月3日に着手した。9月10日に、重機により埋め戻しを行い、調査を終了した。調査区は、建物建築範囲内東西4m、南北7.5mの規模で設定したが、敷地内での排土処理が困難になったため、東西を3.5mに縮小した。重機により盛土等の除去作業を行い基本層Ⅱ面で遺構検出作業を行った。遺構の記録は、平面図・断面図を縮尺1/20で作成した。写真は、フィルムカメラ、デジタルカメラを用いて撮影した。

2. 検出遺構と出土遺物

調査区には盛土が70~80cmあり、その下に旧耕作土であるⅠ層が20~50cmの厚さで堆積している。遺構は、さらにその下層のⅡ層上面で検出した。遺構検出面までの深さは、現地表面から1m程である。

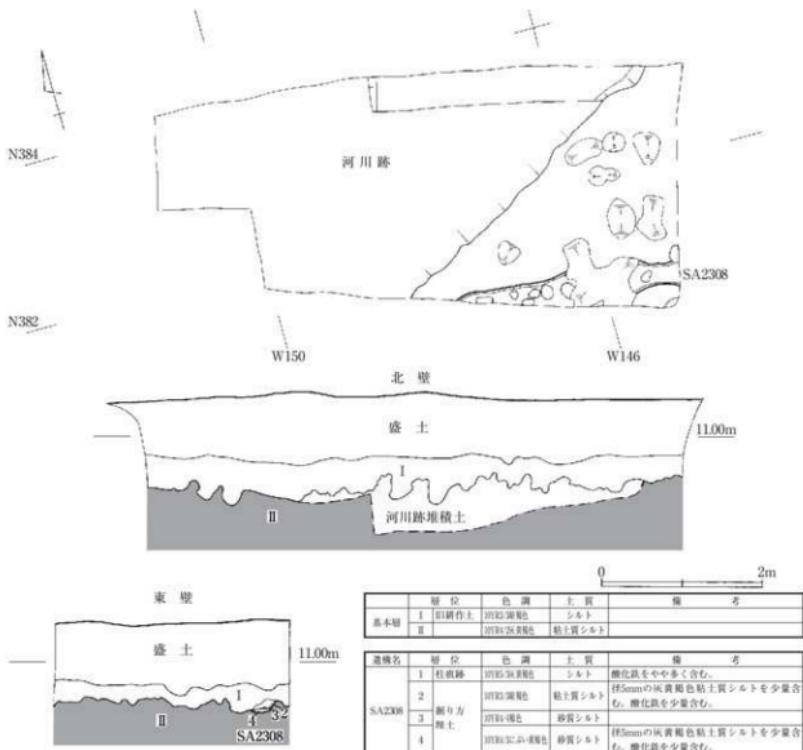
今回の調査では、Ⅱ層上面で材木列1列と河川跡を検出した。河川跡の規模は不明である。調査区北壁に沿って幅50cmの調査区を設定し、最深で50cm程掘下げて土層の堆積状況を確認した。

遺跡の北端部で実施された近年の調査では、遺跡北部に大規模な河川跡があり、遺構が削平されていることが判明している。河川跡とSA2308材木列との新旧関係については今回の調査では判明していないが、周辺と同様の検出状況であることから、今回検出された河川跡は遺跡北端部で検出されている河川跡の一部である可能性が考えられる。

【SA2308材木列】調査区の南東部で検出した。検出長は2.7mである。残存状況は良好ではなく、材の木質部分が接していた痕跡のみを検出した。材の痕跡は、直径10~20cm程の円形や不整円形を呈している。掘り方は上幅25~40cm程で、底面までの深さは最大で東壁断面で17cm程である。検出位置から、想定された郡山遺跡Ⅱ期官衙の北辺材木列の一部であると考えられる。遺物は出土していない。



第55図 第229次調査区位置図 (S=1/2000)



第56図 第229次調査区平・断面図 (S=1/60)

3.まとめ

第229次調査では、Ⅱ期官衙の北辺材木列と考えられるSA2308材木列を検出した。SA2308材木列と第148次調査で検出されたSA616材木列の底面の標高を比較すると、SA2308材木列はSA616材木列よりも約1m高く、削平により残存状況が極めて悪い状況となっている。この状況から、本調査区周辺の元地形が高く、材を設置する際の底面の標高に差が生じたことが推測される。これまで材木列の残存状況は比較的良好で、掘り方の深さなどは一定であった。今回のような遺構の残存状況が極めて悪い地点もあることから、周辺の様相の蓄積を重ね、外部のあり方を検討していきたい。



1. 調査区全景（東から）

写真図版12 第229次調査区

X V. 第231次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第231次調査は個人住宅建築工事に伴う調査である。平成24年3月23日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年6月6日付H24教生文第122-71号で回答)に基づき実施した。調査地点は、郡山廃寺の南門と講堂基壇の中心を結んだ伽藍中軸線上に位置する(第58図)。

調査は平成24年9月19日に実施し、10月3日に終了した。排土置き場の制約から調査は東半部と西半部に分割して実施することとし、最初に東半部、次に西半部の調査を行った。重機により盛土及び基本層Ⅰ・Ⅱ層を除去し、基本層位第Ⅲ層上面で遺構検出作業を行なった。遺構の記録は平面図・断面図を縮尺1/20で作成し、写真はデジタルカメラで撮影した。

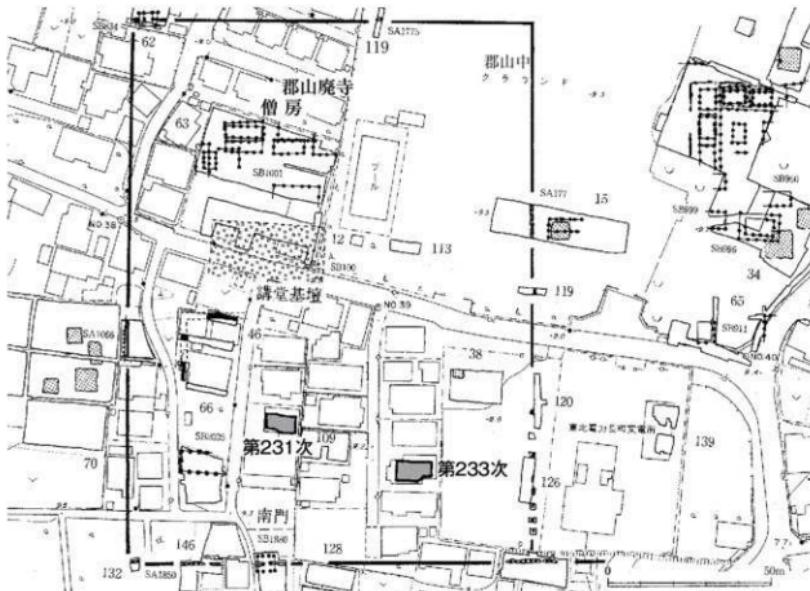
2. 検出遺構と出土遺物

調査区内には盛土が60cm程あり、その下に盛土以前の現代の旧耕作土と推定されるⅠ層が10~30cmの厚さで堆積している。旧耕作土の下には、暗褐色シルト質粘土のⅡ層が20cm程堆積している。遺構は、そのさらに下の黄褐色シルト質粘土のⅢ層上面で検出した。遺構検出面までの深さは1m程である。

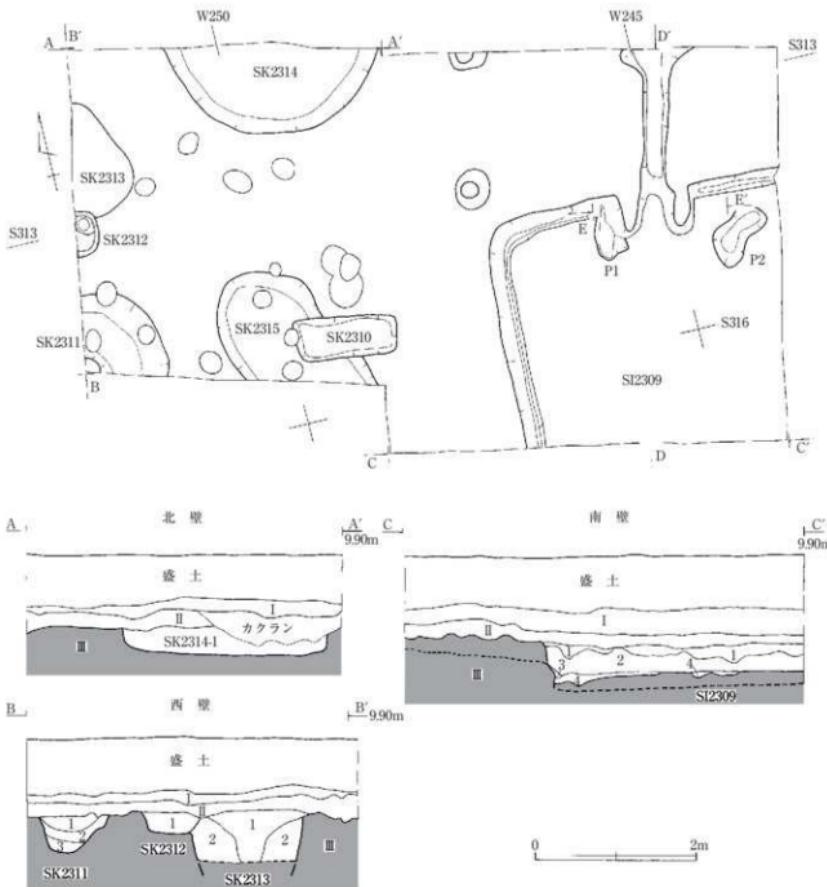
検出された遺構は、竪穴住居跡1軒・土坑6基・ピット17基である。ここでは、検出された主な遺構について報告する。



第57図 第231次調査区配置図
(S=1/400)



第58図 第231・233次調査区位置図 (S=1/1500)

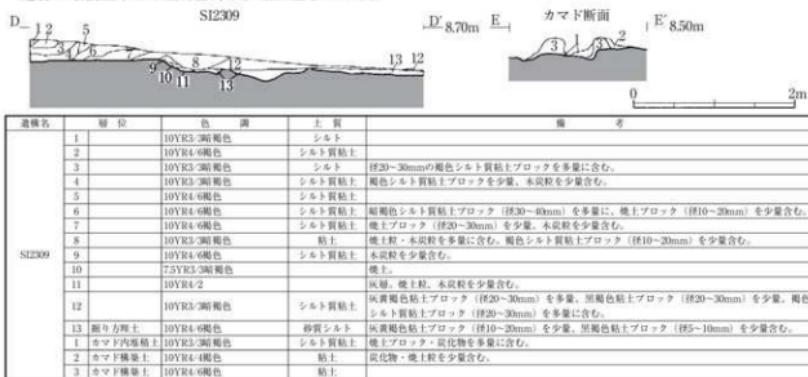


第59図 第231次調査区平・断面図 (S=1/60)

地塊名	層位	色調	土質	備考
基本層	I 人工耕作土	10YR3-4(6)褐色	シルト質粘土	
	II 人工耕作土	10YR3-4(6)褐色	シルト質粘土	本段を粒状に微細に、径5~20mmの褐色シルトブロックを少量含む。
	III	10YR4-3(2.4)5-黄褐色	シルト質粘土	
SI2309	1 人工的堆土	10YK3-3(6)褐色	粘土	0.5~10mmの黒褐色粘土ブロックを少量、径5~10mm黒褐色粘土ブロックを少量含む。
	2 人工的堆土	10YK3-3(6)褐色, 10VR3-2(6)褐色,	粘土	褐褐色粘土は径20~30mmのブロック状、黒褐色粘土は径30~80mmのブロック状、褐色粘土は径20~30mmのブロック状。
	3 何れも耕作土	10YK3-3(6)褐色	粘土	0.5mmの褐色砂質シルトをブロック状に少量含む。
	4 地下水面	10YR4-4(6)褐色	砂質シルト	0.10~20mmの褐黃褐色粘土ブロックを少量、径5~10mm黒褐色粘土ブロックを少量含む。
SK2311	1	10YR4-4褐色	粘土	本段を粒状含む。
	2	10YR4-4褐色	粘土	0.30~50mm黒褐色粘土ブロックを多量に含む。
	3	10YR4-4褐色	砂質シルト	0.20~30mm黒褐色粘土ブロックを多量に含む。
SK2312	1	10YR4-4褐色	粘土質シルト	0.5~20mm黒褐色粘土ブロックを多量に含む。
SK2313	1	10YR4-3(2.4)5-黄褐色	粘土	0.5~10mm黒褐色砂質シルトブロックを少量含む。
SK2314	1	10YR3-2(6)褐色	粘土	0.5~10mmの黒褐色砂質シルトブロックを少量含む。

【SI2309堅穴住居跡】 調査区南東部に位置している。遺構の南東側は調査区外のため、全体の平面形は不明であるが、方形を呈するものと推定される。検出した規模は、住居北壁が4.0m、西壁が2.8mである。主軸方向はN4°Wである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、深さは35cm程度である。掘り方埋土の上面を床面としている。床面上にはカマドの両側に浅い土坑状の窪みがあるのみで、柱穴などは確認されなかった。堆積土は、周溝内の崩落土を除いて2層に細分され、いずれも土層から人為的に埋め戻されている可能性が高い。カマドは北壁に設置されている。ソテを含めた幅は1.1m程度、燃焼部は幅25cm程度、奥行き50cm程度で、奥壁から住居の外側に向かって煙道が1.3m程度伸びている。煙道の先端の煙出しビットの端は調査区外である。

遺物は堆積土中から土師器片が少量出土している。



第60図 SI2309断面図 (S=1/60)

【SK2310土坑】 調査区の中央南部に位置している。平面形は長方形を呈する。規模は東西13m程、南北55cm程の長方形で、深さは10cm程である。堆積土は暗褐色粘土の単層である。SK2315土坑と重複し、これよりも新しい。

遺物は、堆積土中から土師器片、須恵器片、瓦片が少量出土している。

【SK2311土坑】 調査区南西隅に位置している。遺構の大部分が調査区外のため平面形は不明である。検出した規模は南北1m、東西1.1m、深さは45cm程である。堆積土は3層で、すべての土層にブロック状の土を多量に含んでおり、人為的に埋め戻されている可能性が高い。

遺物は、堆積土中から土師器片、須恵器片、平瓦、丸瓦が出土している。

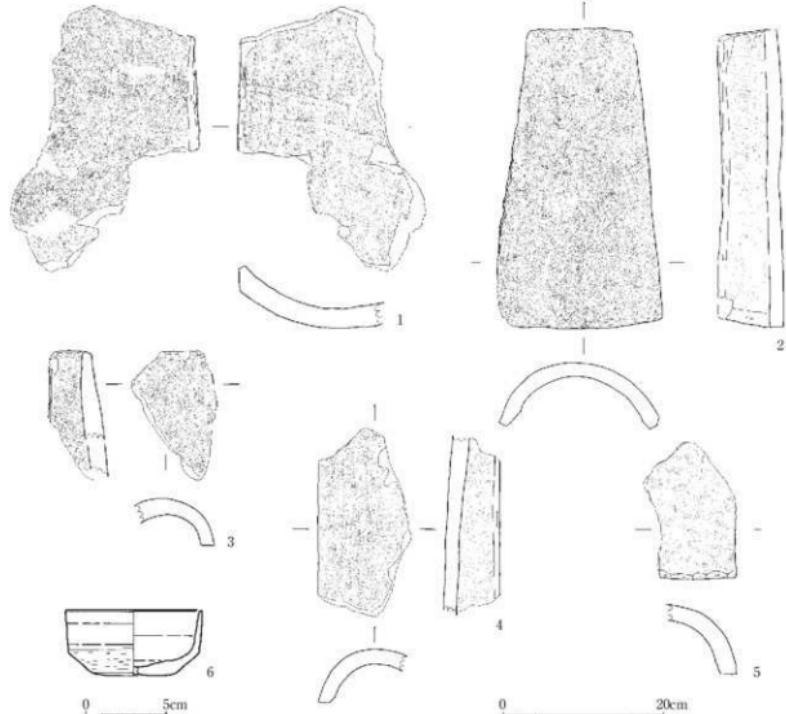
【SK2312土坑】 調査区西壁際に位置している。遺構の西側は調査区外のため平面形は不明である。検出した規模は、南北60cm、東西60cm、深さ25cm程である。堆積土は褐色粘土質シルトの単層で、ブロック状の土を多量に含んでいることから人為的に埋め戻されている可能性が高い。SK2313土坑と重複し、これよりも新しい。

遺物は、堆積土中から土師器片、須恵器小片がわずかに出土している。

【SK2313土坑】 調査区西壁際に位置している。遺構の西側は調査区外のため平面形は不明である。検出した規模は南北1.4m、東西80cmである。調査は工事に伴う削平が検出面から約60cmより深く及ばないため、その深度までで留めている。堆積土は2層に分層され、ブロック状の土を多量に含んでいることから人為的に埋め戻されている可能性が高い。堆積土1層には瓦片を主とした遺物が多量に含まれていることから、上層に瓦類を廃棄したと推定される。SK2312土坑と重複し、これよりも古い。遺物は、堆積土1層を主として土師器、須恵器、平瓦・丸瓦が出土しており、総量は平箱1箱分である。G-150平瓦は、粘土板巻き作りによる平瓦で、凸面は縄叩き後にヘラケズリが施されるものである(第61図1)。F-110・111・112・113は、粘土板巻き作りによる丸瓦である(第61図2~5)。

F-110は完形で、凸面は縄叩き後に横方向のナデによって叩き目が消されている。F-111・112・113の凸面は、叩き具の痕跡が観察できないほど丁寧なヘラケズリによって叩き目が消されている。胎土は緻密で、細かい白色粒と白色の骨針を含んでいる。以上の平瓦・丸瓦の特徴は、これまでに郡山廃寺で出土しているものと同様の特徴である。

【SK2314土坑】調査区北壁際に位置している。遺構の北側が調査区外のため平面形は不明である。検出した規模は、南北1.1m、東西2.7m、深さ35cm程度である。堆積土は1層である。遺物は、堆積土中から底部が平底で、体下部に後と1条の沈線があり、体部が直立するE-576須恵器環が出土している（第61図6）。その他、堆積土中から須恵器片や土器片などが少量出土している。



団版	登録番号	種別	器形	出土地点	法量(cm)	成形・調整・備考	写真
1	G-150	丸瓦	平瓦	SK2313 1層	最大長:32.8 正面幅:18.4	正面:布目板 凸面:繩叩き+ナデ 回線:ヘラケズリ	16.7
2	E-110	丸瓦	丸瓦	SK2313 1層	最大長:37.1 正面幅:19.4	正面:布目板 凸面:繩叩き+ナデ 回線:ヘラケズリ	14.8
3	F-111	丸瓦	丸瓦	SK2313 1層	最大長:15.9 正面幅:8.9	正面:布目板+ナデ 凸面:ナデ(繩叩き+一部残存) 回線:ケズリ	14.9
4	F-112	丸瓦	丸瓦	SK2313 1層	最大長:16.6 正面幅:10.5	正面:布目板 凸面:ハラナデ 回線:ヘラケズリ	14.10
5	F-113	丸瓦	丸瓦	SK2313 1層	最大長:16.6 正面幅:10.5	正面:布目板+ナデ 凸面:ナデ 回線:ヘラケズリ	14.11
団版	登録番号	種別	器形	出土地点	法量(cm)	外側調整	内面調整
6	E-576	須恵器	环	SK2314	口径:8.4 厚径:5.2 高さ:4.1	口クロナデ ヘラケズリ	口クロナデ

第61図 SK2313・2314出土遺物

3.まとめ

第231次調査区では、竪穴住居跡1軒と土坑5基が検出された。出土遺物から郡山廃寺との関連性が考えられるのはSK2313土坑である。これ以外の遺構については、遺物などから時期を推定することはできなかった。



1. 調査区東半部南壁断面（北から）



2. 調査区西半部全景（東から）



3. SI2309床面検出状況（南から）



4. SI2309カマド横断面（南から）



5. SK2313（東から）



6. SK2314（南から）



7. G-150平瓦



8. F-110丸瓦



9. F-111丸瓦



10. F-112丸瓦



11. F-113丸瓦



12. E-576須恵器

写真図版13 第231次調査区及び出土遺物

X V. 第233次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第233次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成24年9月14日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年12月7日付H24教文第122-231号で回答)に基づき実施した。調査地点は、郡山廢寺の南東部に位置している(第58図)。

調査は、平成24年10月10日に着手し、17日に終了した。調査区は、建物建築範囲に東西10m、南北6mの規模で設定した。重機により盛土および基本層位第Ⅰ層を除去し、基本層第Ⅱ層上面で遺構検出作業を行なった。遺構の記録は、平面図を縮尺1/20と1/40、断面図を縮尺1/20で作製した。写真はフィルムとデジタルカメラで撮影した。調査終了後は、重機を用いて埋め戻しを行った。



第62図 第233次調査区配置図

(S=1/400)

2. 検出遺構と出土遺物

調査区内には盛土が25~45cm程あり、その下に旧耕作土であるⅠ層が10~60cmの厚さで堆積している。遺構は、そのさらに下にぶい黄褐色土のⅡ層上面で検出された。Ⅱ層上面は、耕作に伴う南北方向の溝状の天地返しを受けている状況であった。現地表面から天地返しの影響を受けずに残存する基本層位第Ⅱ層上面までの深さは、最も浅い箇所で50cm程、最も深い箇所で90cm程である。

検出した遺構は、竪穴住居跡1軒、土坑1基である。

【SI2316竪穴住居跡】本調査区南東部に位置する。遺構の東側が削平されており、堆積土及び床面が失われている。一部の検出のため、平面形は不明であるが、隅丸方形を呈するものと推定される。規模は東西3.1m以上、南北1.0m以上である。掘り方理土を床面としている。床面上では主柱穴や周溝は検出されなかった。壁は床面から急に立ち上がり、壁高は最も残存している箇所で床面から17cmを測る。住居内堆積土は2層に細分され、Ⅰ層は自然堆積土、2層は炭化物を主体とする機能時の堆積土である。カマドは北辺に敷設されており、西側壁、燃焼部、煙道を検出した。なお、カマド袖の右側の掘り方底面で深い土坑を検出したが、堆積土が掘り方理土を類似することから、掘り方の窪みの可能性がある。SK2317土坑と重複するものとみられるが、新旧関係は不明である。



0 5cm

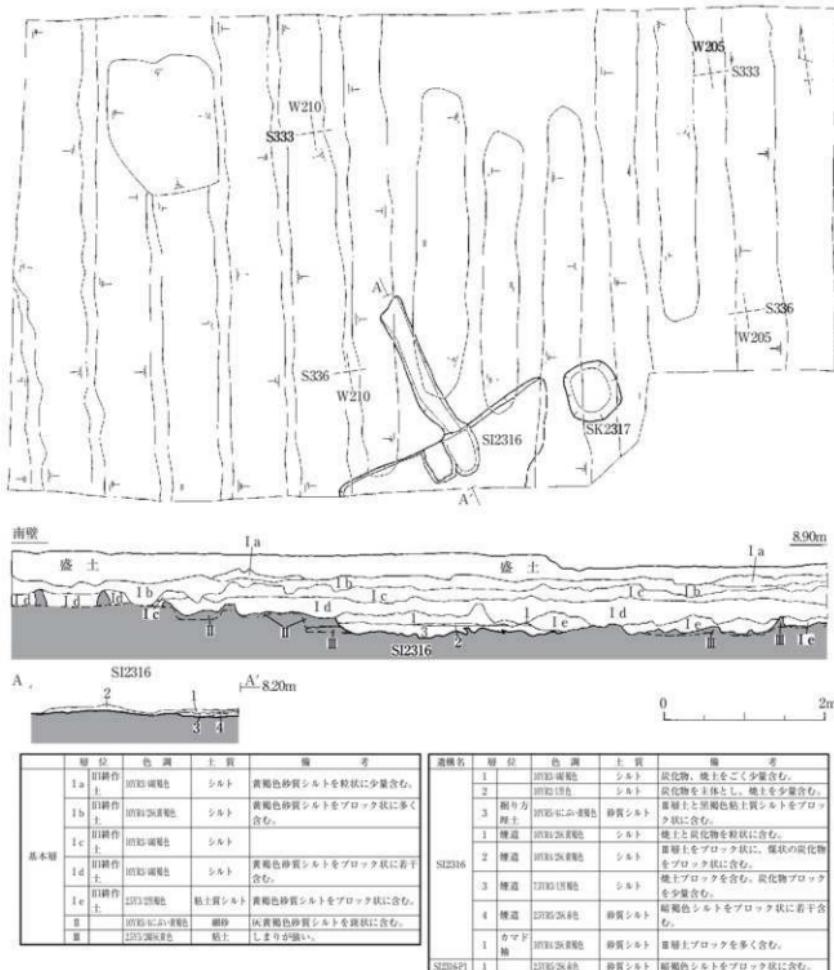
回収番号	登録番号	種別	器形	出土地点	法量(cm)	外周調整	内周調整	写真回数
1	C-1138	土器器	坪	SI2316 床面	口径:10.1 器高:3.5	口縁部:ヨコナデ 体部:手待ちケズ	ヨコナデ	15-4

第63図 SI2316出土遺物

遺物は、床面からC-1138土器器坪が完形で出土している(第63図)。C-1138土器器坪は、色調が橙色で半球形を呈し、口縁部が短く屈曲する関東系土器である。その他に、住居内堆積土中から土器器壺の破片などが出土している。

【SK2317土坑】調査区の南西部に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸75cm程、短軸65cmである。深さは15cm程である。断面形は皿状を呈する。堆積土は、黄褐色の砂質シルトを含む灰黄褐色の粘土質シルトの單層である。SK2317土坑は、SI2316竪穴住居跡に伴う施設である可能性も推定されるが、詳細は不明である。

遺物は出土していない。



第64図 第233次調査区平・断面図 (S=1/60)

3.まとめ

第233次調査では、堅穴住居跡1軒、土坑1基を検出した。

SI2316堅穴住居跡は、残存状況が悪く、検出も一部であることから、全体を把握することはできない。床面から北武藏型暗文瓦系のC-1138坪が出土しており、その特徴から7世紀中頃から後半頃の遺物と考えられる。

SK2317土坑は、位置や規模からSI2316堅穴住居跡に伴う遺構の可能性もあるが、削平の影響により明らかにすることはできなかった。



1. 調査区全景（南東から）



2. 南壁断面（北東から）



3. SI2316床面検出状況（東から）



4. C-1138土師器片

写真図版14 第233次調査区及び出土遺物

X VI. 第234次発掘調査

1. 調査経過と調査方法

第234次調査は、個人住宅建築工事に伴う調査である。平成24年10月23日付けで申請者より提出された「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成24年11月2日付けH24教生文第122-268号で回答)に基づき実施した。調査地点は、郡山遺跡の北東部に位置する(第66図)。

調査は平成24年9月12日に着手し、16日に終了した。建物建築範囲内に東西7m、南北2mの規模で設定した。重機により盛土及び旧耕作土であるI層を除去し、遺構検出作業を行なった。遺構検出作業後には、調査区の東西端に幅50~60cmの調査区を設け、遺構検出面から約50cm掘下げて下層の土層の堆積状況を確認した。

遺構の記録は平面図・断面図を縮尺1/20で作成し、写真はデジタルカメラで撮影した。

2. 検出遺構と出土遺物

調査区には盛土が40~50cmあり、その下に旧耕作土であるI層がある。I層は2層に細分され、Ia層は20~30cm、Ib層は35~50cmの厚さでそれぞれ堆積している。遺構はさらにその下の基本層位第II層上面で検出した。

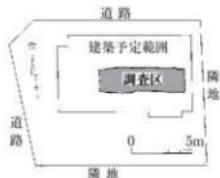
検出されたのは、溝跡2条と河川跡である。断面観察により、2条の溝跡はI層上面から掘り込まれていることが明らかとなった。河川跡はII層上面で検出された。方向や規模は不明で、1.5mの深さで川原石の集積層が検出された。

【SD2318溝跡】調査区北東部と北壁断面で検出した。調査区南壁では、北壁で検出されている堆積土層に対応する土層が検出されていない。このことから、SD2318溝跡は、SD2319溝跡の北端で分岐あるいは本来連続した溝跡の可能性が推定される。遺物は出土していない。

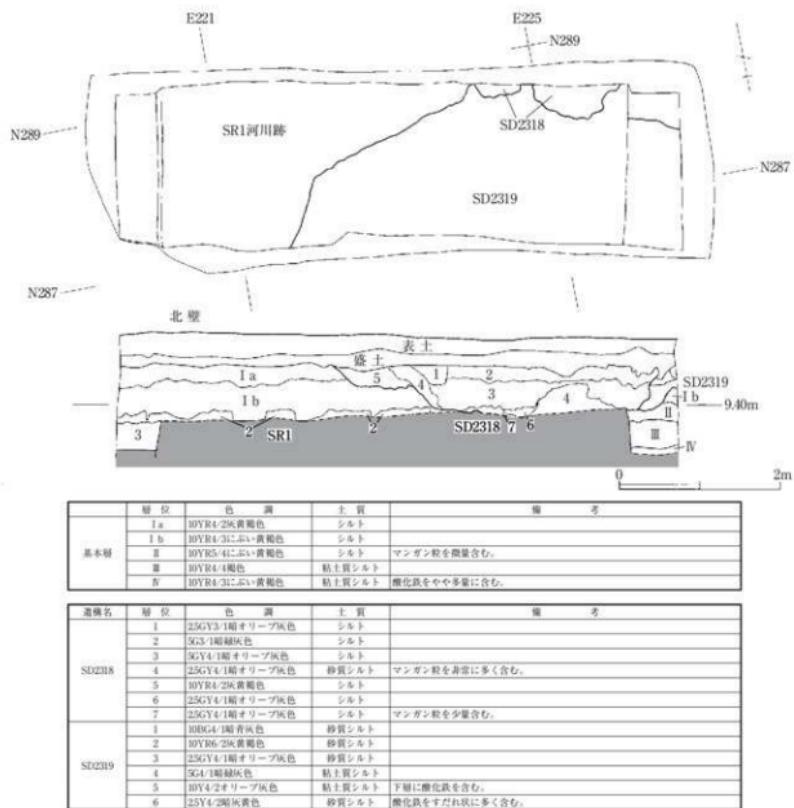
【SD2319溝跡】調査区中央部に位置する。調査区内では北端のみの検出で、規模等は不明である。方向は、北東-西南西方向と考えられる。河川跡よりも新しい。遺物は出土していない。

3. まとめ

第234次調査では、溝跡2条が検出された。いずれも旧耕作土であるI層上面から掘り込まれていることから、古代の遺構ではないと考えられる。河川跡については、遺跡北部で検出されている大規模な河川の一部である可能性が推察される。



第65図 第234次調査区位置図
(S=1/400)



第67図 第234次調査区平・断面図 (S=1/60)



1. 調査区全景(西から)



2. 北壁断面(南から)

写真図版15 第234次調査区

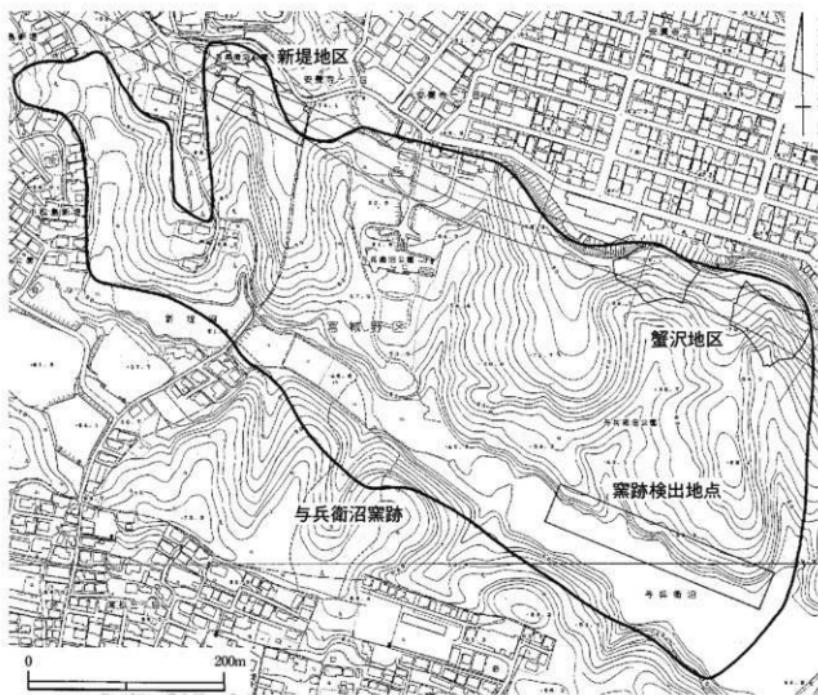
第3章 与兵衛沼窯跡－蟹沢地区南地点－

1. 調査経過と調査方法

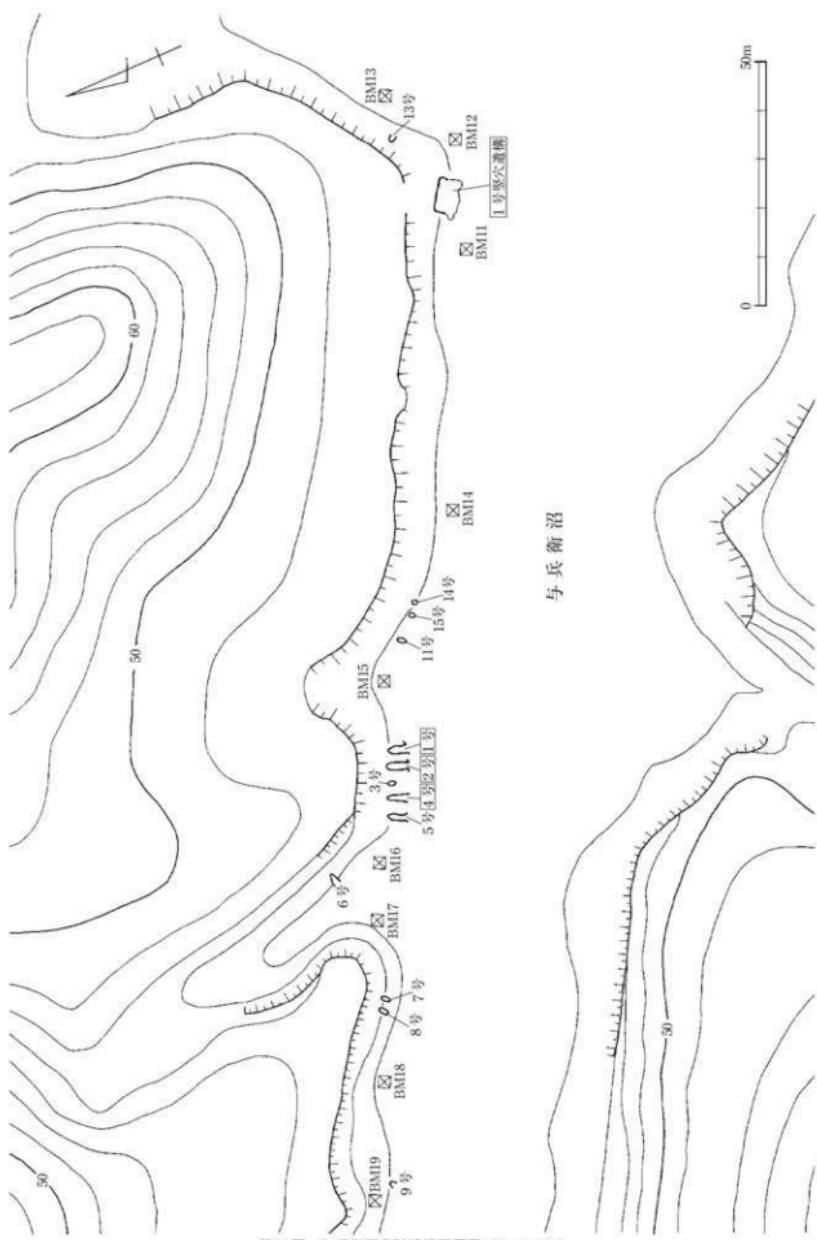
今回の調査は、平成23年3月の東日本大震災により、与兵衛沼の水利施設復旧工事のため沼の水位を下げたところ、沼の北岸の沼底から窯跡が露出した。この状況を受けて現地踏査を行ったところ、瓦片の分布が沼岸に沿って広範囲に見られ、さらに多くの窯跡が発見された。平成23年6月26日と8月4日に、これらの遺構の位置や遺物の分布を調査したところ、計13基の窯跡を確認するに至った。今回の調査は、震災復旧工事が終了し、再び与兵衛沼へ貯水する前に遺構の詳細について把握することを目的とした。

調査は平成24年5月8日から開始した。調査方法は、平成23年度の分布調査の成果を元に、遺構がまとまっている範囲及び遺構の検出が予想される範囲を8箇所に地区設定して作業にあたった。

遺構の記録は、平面図を縮尺1/20と1/40、断面図を縮尺1/20で作成した。写真は、フィルムカメラとデジタルカメラで作成した。調査成果を広く市民に公開するため、6月3日に遺跡見学会を開催した。調査終了後、検出した遺構の保護のため、植物性のシートで養生し発生土で埋め戻しを行った。



第68図 与兵衛沼窯跡位置図 (S=1/5000)



第69図 与兵衛沼窯跡遺構配置図 (S=1/1000)

2. 検出遺構と出土遺物

発見された遺構は、窯跡13基、竪穴遺構1軒である（第69図）。遺構は、与兵衛沼北岸の東西約250m、南北約20mの範囲に分布している。遺構が検出された周辺の地形は、与兵衛沼の開削や沼の水によって侵食されており、北岸に沿った公園遊歩道と遺構検出面までの比高差が1～2m程ある。

調査区範囲の沼岸には、沼の堆積土が堆積しており、瓦片が多く含まれている。それを除去するとにぶい黄褐色シルト質粘土の基本層（地山）が検出される。遺構はその上面で検出された。

（1）窯跡

検出された13基の窯跡のうち、残存状況が良好であるのは1、2、4、5号窯跡の計4基である。その他の窯跡は、与兵衛沼の開削や沼の水によって削平・侵食されているため、窯体の一部の検出にすぎないものや、地山に被る痕跡が認められる程度のものであった。

【1号窯跡】（第71図）

【位置・検出状況・方向】調査範囲の中央部にあたり、残存状況の良好であった4基の窯の中で最東端に位置する。焼成部の一部、燃焼部、前庭部、灰原の一部を検出した。天井部、奥壁、煙道部は失われている。焼成部～燃焼部までの検出長は4.7mである。中軸線の方向は、N-17°-Eである。

【窯体構造】有階無段の窯窓と考えられる。

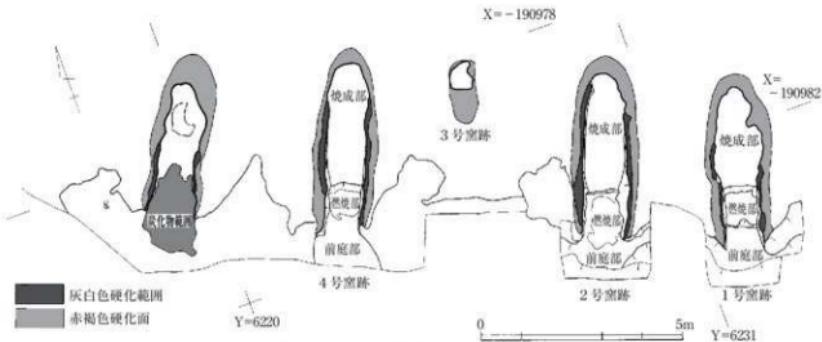
【焼成部】平面形は、奥壁が削平されているため不明である。残存長は2.3m程、床面の最大幅は1.2m程、残存壁高は最大で10cm程である。床面は18度の斜面で、凹凸はなくほぼ平坦である。床面は灰色で非常に硬化している。壁面は、焼成部から燃焼部にかけての西壁で長さ2.1m、東壁で長さ60cm、各幅10cm程が被熱によって灰白色を呈し硬化している。窯体の周囲は、被熱によって赤褐色を呈している。床面までの検出留めているため、操業面数は不明である。

【燃焼部】長さは1.0m程、最大幅は0.8m程、残存壁高は最大で20cm程で、平面形は方形である。焼成部の境には15cmの程の階があり、焚口と燃焼部との境には5cm程の段が確認された。壁面と床面の大部分は硬化しており、黄橙色を呈している。

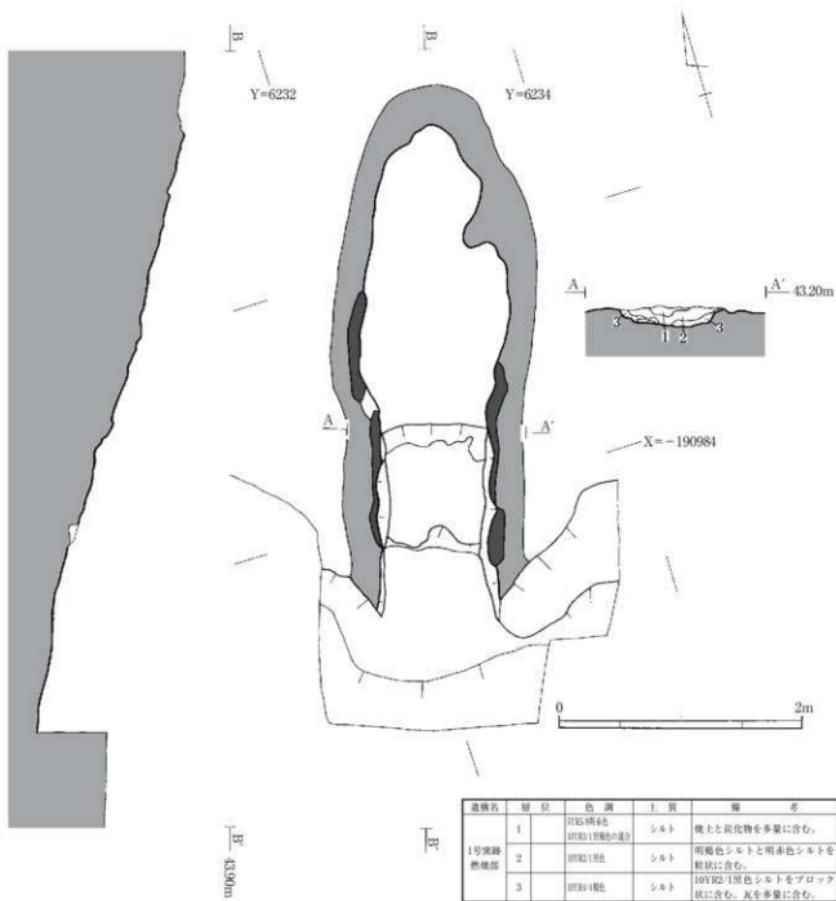
【灰原】前庭部の両側と両側に広がる。2号窯跡の灰原との新旧関係は不明である。

【堆積層】焼成部1層は、焼土と炭化物を多量に含む層で、窯体崩落土と考えられる。2層は炭化物を主体とする黒色シルト土で、操業終了後の流入土と考えられる。3層は床面直上の褐色シルト土で、瓦片を含む層である。

【出土遺物】焼成部、燃焼部、前庭部、灰原から須恵器と瓦が出土しており、瓦が大部分を占めている。灰原出土の瓦片の中には、偏行唐草文軒平瓦（多賀城出土瓦分類620）の瓦当面の破片が含まれている（第74図2）。



第70図 1～5号窯跡平面図 (S=1/120)



第71図 1号窯跡平・断面図 (S=1/40)

【2号窯跡】(第72図)

【位置・検出状況・方向】1号窯跡の西に隣接して位置する。1号窯との間隔は1.5m程度である。焼成部の一部、燃焼部、前庭部、灰原の一部を検出した。天井部、奥壁、煙道部は失われている。焼成部～燃焼部までの検出長は4.6mである。中軸線の方向は、N.20°Eである。

【窯体構造】有階無段の窑窓と考えられる。

【焼成部】平面形は、奥壁が削平されているため不明であるが、側壁の検出状況から、奥壁部分は楕円を描くようにはまるものと推定される。残存長は2.9m程、床面の最大幅は1.0m程、残存壁高は最大で30cm程である。床面は14度の斜面で、やや凹凸はあるが概ね平坦である。床面の中央部は黄褐色、奥壁付近は灰白色を呈し硬化してい

る。壁面は、焼成部から燃焼部にかけて西壁で長さ2.3m、東壁で長さ2.3m、各幅10~20cm程が被熱によって灰白色を呈し硬化している。窯体の周囲は被熱によって赤褐色を呈している。床面までの検出留めているため、操業面数は不明である。

【燃焼部】長さは1.2m程、幅は0.8m程、残存壁高は最大で15cm程で、平面形は方形である。東西両壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面には凹凸は見られず、ほぼ平坦である。燃焼部と焼成部の境には10cm程の段が確認された。壁面と床面の大部分は硬化し、底面の一部は赤褐色を呈している。

【堆積層】焼成部（A-A'）の1層は炭化物をわずかに含むにぶい黄褐色シルトで、窯体崩落土と考えられる。2層は、瓦片を多く含む黒色の炭層、3・4層は操業終了後の流入土と考えられる。

【灰原】燃焼部の西側と前底部の南側に広がる。1号窯跡の灰原との新旧関係は不明である。

【出土遺物】焼成部床面とその直上の堆積土中から瓦が主体的に出土している。

【4号窯跡】（第73図）

【位置・検出状況・方向】2号窯跡の西に隣接して位置する。2号窯との間隔は6.0m程である。焼成部の一部、燃焼部、前底部、灰原の一部を検出した。天井部、奥壁、煙道部は失われている。焼成部～燃焼部までの検出長は4.6mである。中軸線の方向は、N-23°-Eである。

【窯体構造】有階無段の窑窓と考えられる

【焼成部】平面形は、奥壁が削平されているため不明である。残存長は3.2m程、床面の最大幅は1.0m程、残存壁高は最大で18cm程である。床面は19度の斜面で、やや凹凸はあるが概ね平坦である。床面の中央部は黄橙色、奥壁付近は灰白色を呈し硬化している。壁面は、焼成部から燃焼部にかけての西壁で長さ2.2m、東壁で長さ3.2m、各幅6~20cm程が被熱によって灰白色を呈し硬化している。窯体の周囲は、被熱によって赤褐色を呈している。床面までの検出留めているため、操業面数は不明である。

【燃焼部】長さは1.0m程、幅は0.8m程、残存壁高は最大で15cm程で、平面形は長方形である。東西両壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面には凹凸は見られず、ほぼ平坦である。燃焼部と焼成部の境は、明瞭な段はみられず、緩やかな傾斜となっている。壁面と床面の大部分は硬化し、被熱により底面のほぼ全面が赤褐色を呈している。

【堆積層】焼成部の堆積土は4層に細分した。1・4層は黄褐色シルトで瓦片を少量含む層で、窯体崩落土と考えられる。3層は黒褐色砂質シルトで、窯操業終了後の堆積土と推定される。4層は瓦片を多く含む褐色シルト層で窯操業終了直後の窯体崩落土あるいは流入土と考えられる。

【灰原】燃焼部～前底部の東西両側に炭化物と焼土を多量に含んでいる。東側灰原は、焼成部付近まで張り出すように分布している。5号窯跡灰原との新旧関係は不明である。

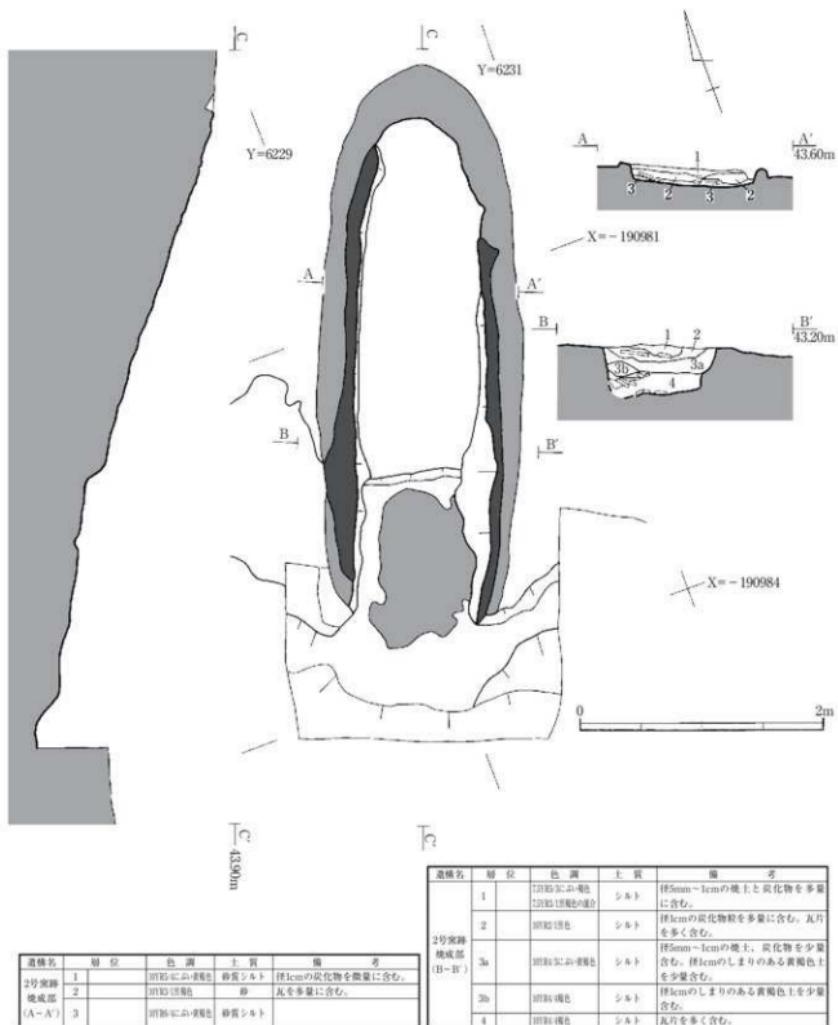
【出土遺物】焼成部床面とその直上の堆積土中から瓦が主に出土している。灰原からは瓦が主に出土しており、その中に瓦当面破片が含まれていた1号窯跡灰原から出土したものと同様の偏行唐草文軒平瓦（多賀城出土瓦分類620）である。

【5号窯跡】

【位置・検出状況】焼成部の一部、燃焼部、前底部、灰原の一部を検出した。窯跡を検出したのみで、掘り込み等の調査は実施していない。

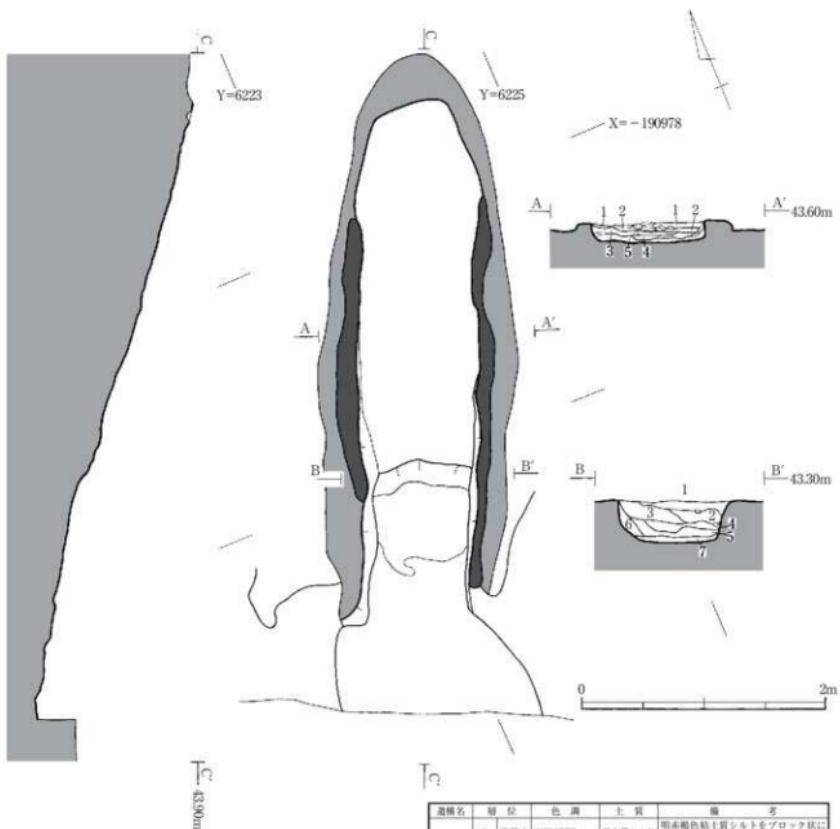
【規模】検出長は4.1mである。

【灰原】燃焼部～前底部の東西両側に炭化物と焼土を多量に含んでいる。東側灰原は、焼成部付近まで張り出すように分布している。4号窯跡灰原との新旧関係は不明である。



第72図 2号窯跡平・断面図 (S=1/40)

【出土遺物】灰原から瓦片、須恵器が出土している。須恵器壺が3個体あり、底部のすべてに「上人」・「人」と焼成前にヘラ書きされている（第75図）。体部は直線的に外傾し、底部は平底である。底部は切り離した後に回転ケズリが施されている。口径は15cm前後、底径10cm前後、器高10cm前後と比較的まとまっている。

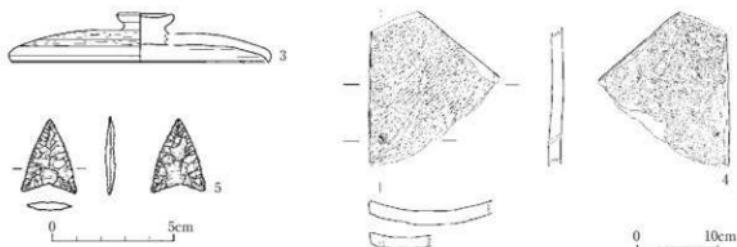


道標名	層位	色調	土質	備考
4号窓跡 後成部	1	暗灰褐色	シルト	瓦片を含む。
	2	暗灰褐色	シルト	H2~5mmの褐灰色シルトを粒状に多く含む。
	3	暗灰褐色	砂質シルト	H2~5mm褐灰色シルトを粒状に多く含む。
	4	暗灰褐色	砂質シルト	H2~5mmの褐灰色シルトを粒状に多く含む。瓦片を多量に含む。
	5	暗灰褐色	シルト	明褐色シルトを粒状に少量化。
	6	暗灰褐色	シルト	明褐色シルトを粒状に少量化。
	7	暗灰褐色	粘土質シルト	しまりが強く硬化している。

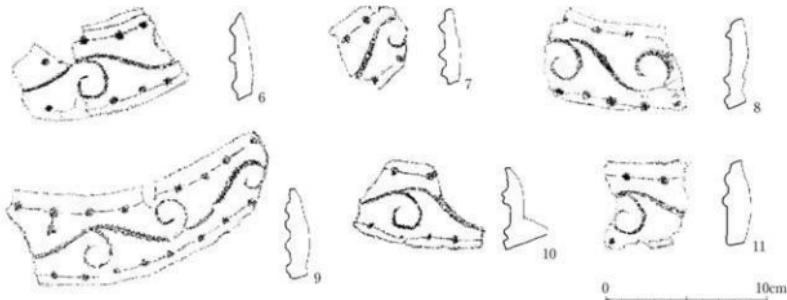
第73図 4号窓跡平・断面図 (S=1/40)



国版 番号	登録 番号	種別	器形	出土地点	法量 (cm)	外面調整	内面調整	写真 図版
1	E-2	須彌器	器形	1号窯 从原 口径 : 21.8		瓶部～口縁部 : ロクロナデ	瓶部～口縁部 : ロクロナデ	-
2	G-9	瓦	軒平瓦 (瓦当)	1号窯 从原 瓦当面長 : 13.2 瓦当面厚さ : 5.0		輪行唐草文 瓦当面表 : 茄 瓦当面裏 : ハラキザミ		写真 図版
								17.4

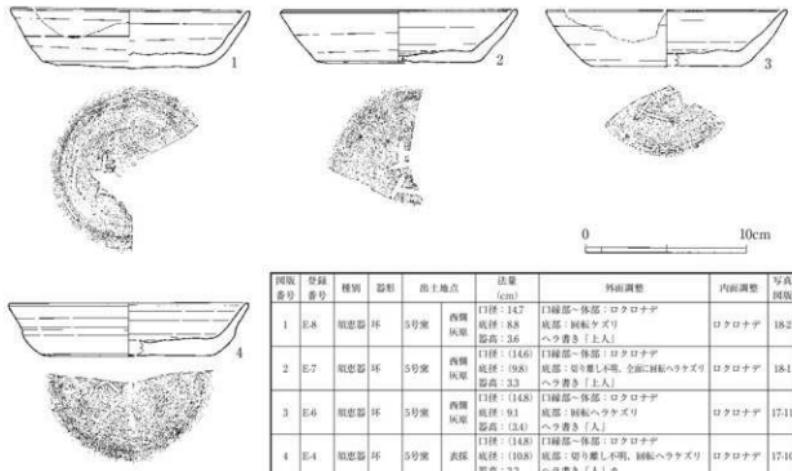


国版 番号	登録 番号	種別	器形	出土地点	法量 (cm)	外面調整	内面調整	写真 図版
3	E-10	須彌器	蓋	2号窯 从原		口縁部～全体 : ロクロナデ, 回転ケズミ ロクロナデ		-
4	G-16	瓦	輪切瓦	2号窯 从原 最大長 : 17.2 底幅 : 16.1		正面 : 布目地→ナデ 向面 : 滅明き→ナデ, 一部布目地有り		写真 図版
5	K-1	石器	石器	2号窯 表上 最大長 : 30.5 最大幅 : 2.2 厚さ : 0.3		重さ (g) : 1.5	石材	写真 図版
								17.8
								17.9



国版 番号	登録 番号	種別	器形	出土地点	法量 (cm)	成形・調整・備考	写真 図版
6	G-10	瓦	軒平瓦 (瓦当)	4号窯 从原 瓦当面長 : 10.5 瓦当面厚さ : 4.8		瓦当面表 : 茄	-
7	G-11	瓦	軒平瓦 (瓦当)	4号窯 从原 瓦当面長 : 4.5 瓦当面厚さ : 4.0		瓦当面表 : 茄	17.2
8	G-12	瓦	軒平瓦 (瓦当)	4号窯 从原 瓦当面長 : 8.5 瓦当面厚さ : 6.4		瓦当面表 : 茄	17.3
9	G-13	瓦	軒平瓦 (瓦当)	4号窯 从原 瓦当面長 : 15.0 瓦当面厚さ : 5.5		瓦当面表 : 茄	17.4
10	G-14	瓦	軒平瓦 (瓦当)	4号窯 从原 瓦当面長 : 8.1 瓦当面厚さ : 4.9		瓦当面表 : 茄	17.5
11	G-15	瓦	軒平瓦 (瓦当)	4号窯 从原 瓦当面長 : 5.5 瓦当面厚さ : 5.0		瓦当面表 : 茄	17.7

第74図 1・2・4号窯跡出土遺物



第75図 5号窓跡灰原出土遺物・5号窓跡付近表面探出土遺物

【1号竪穴遺構】(第76図)

【位置】調査範囲の東端付近に位置する(第69図)。

【規模・平面形】規模は東西約7m、南北5m以上と推定される。遺構の北半部が残存しており、南半部は沼の開削や水の浸食によって削平されたと考えられる。全体の平面形は不明であるが、東西に長軸を持つ長方形、あるいは正方形を呈するものと推定される。

【堆積土】堆積土は4層に細分した。1～3層は遺構内堆積土、4層は周溝内堆積土である。1層は炭化物と焼土を含む地山を主体とした層、2層は炭化物ブロックを含む地山を主体とした層、3層は黄褐色粘土質シルトブロックを少量含む層で、すべて自然堆積土と考えられる。5層は掘り方埋土である。

【床面】掘り方埋土を床面としている。床面上では主柱穴等は検出されなかった。

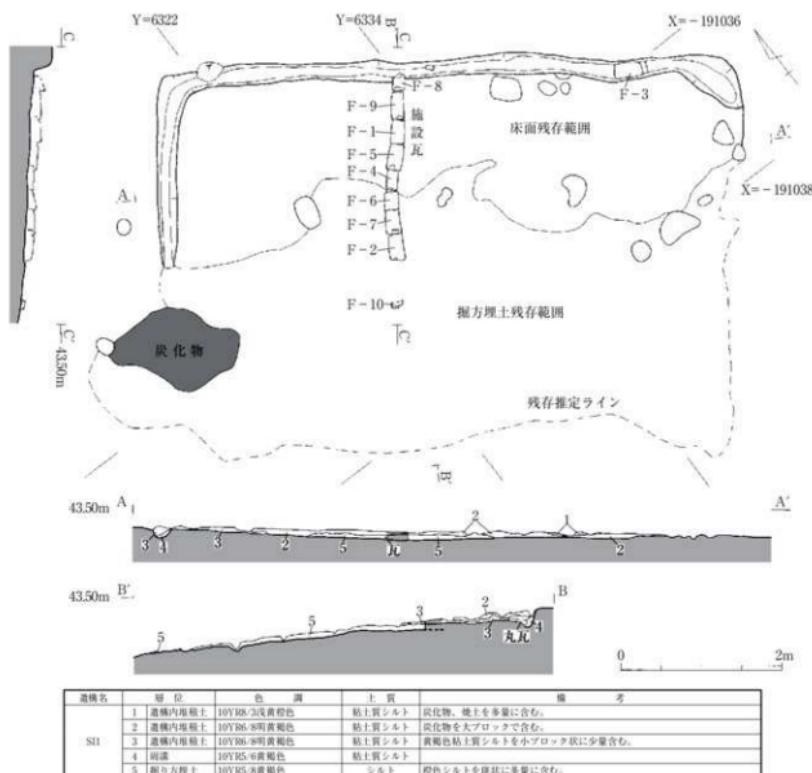
【周溝】竪穴遺構の北辺と西辺北部で検出した。上幅は20～30cm、下幅10～20cm、床面からの深さは10～15cmである。北辺周溝の東部では、1枚の丸瓦が凸面を上面にして敷設されていた。

【内部の施設等】床面の中央部で、検出長2.25m、幅10～15cmの南北方向の溝跡を検出した。溝跡には、凸面を上面にして9枚の丸瓦が敷設されている状況であった。9枚の丸瓦のうち、8枚は、須端部を北方向に向け、玉縁を連結させて敷設されていた。建物内の排水施設と考えられる。

遺構の南西部では、炭化物の集積範囲を検出したが、遺構に伴うものかは不明である。

【出土遺物】遺物は、床面から須恵器環1点が出土した(第78図5)。E-1須恵器環は、底部には回転条切り痕が残る平底の環である。色調は浅黄褐色を呈しており、焼成状況は良好ではない。

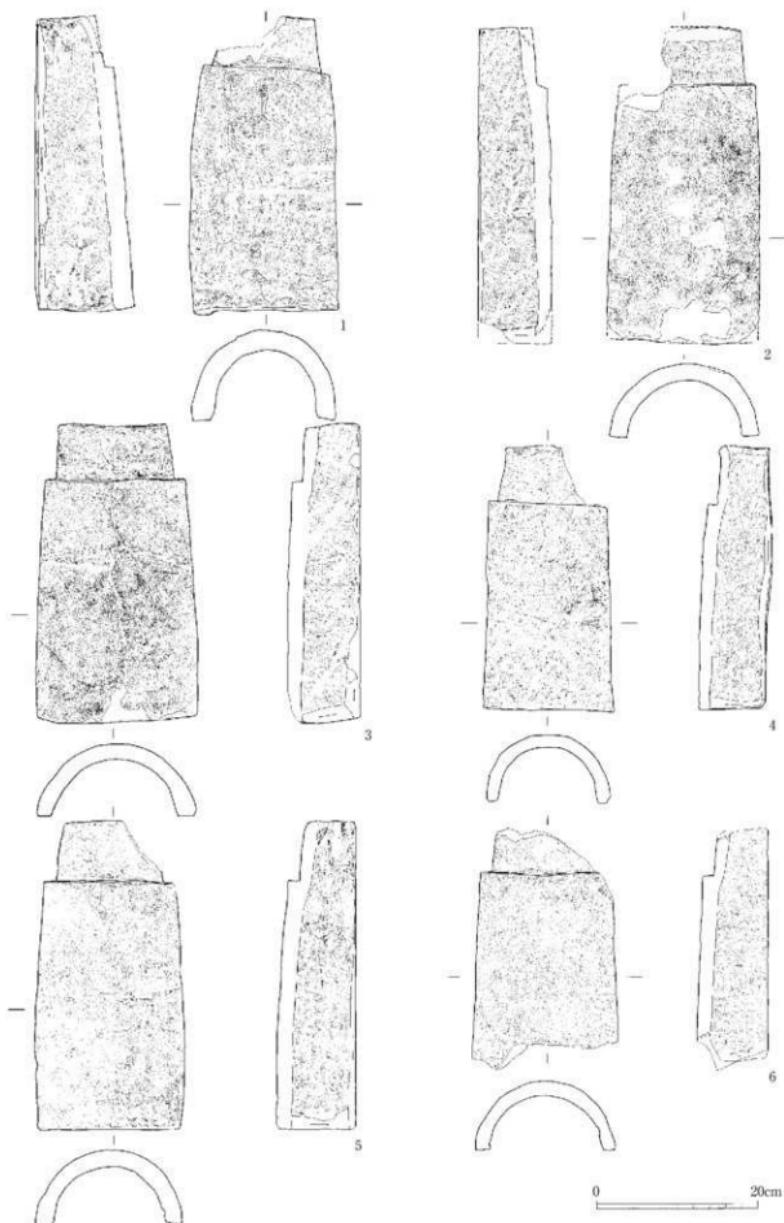
周溝からは土師器環1点、丸瓦1点が出土した。C-1土師器環は平底で、体部は直線的に外傾し、全体が逆台形に近い器形である。器壁全体がもろいため調整は不明瞭であるが、外面は底部から体部にかけて手持ちケズリ、内面はミガキと黒色処理が施されたものである(第78図4)。F-3丸瓦は、粘土織巻き作りで、凹面に布目が明瞭に残り、凸面には繩叩きが残る有段の丸瓦である。繩叩き後にロクロナデ調整がみられる。多賀城出土瓦分類II



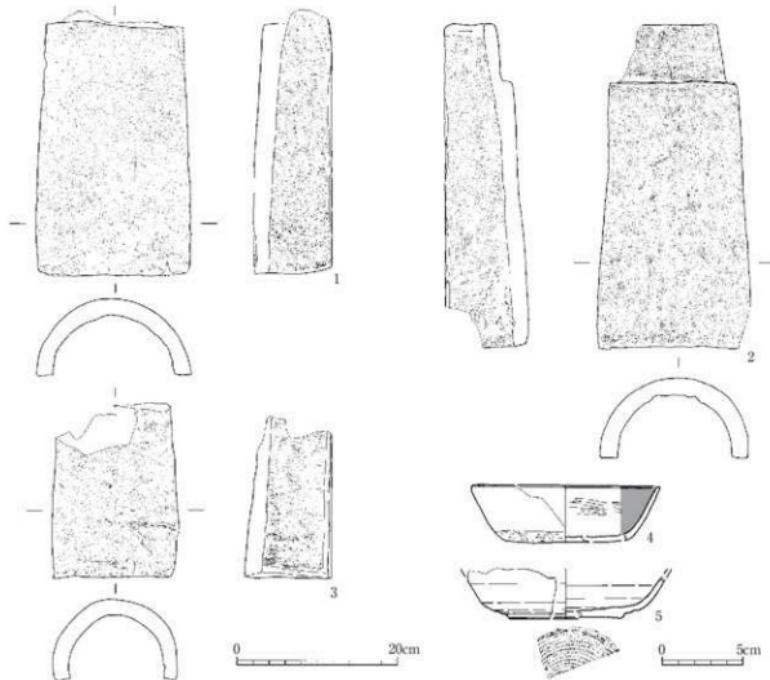
第76図 1号竪穴遺構平・断面図 (S=1/60)

B類 (aタイプ) と考えられる (第78図3)。

排水溝跡からは9点の丸瓦が出土した。そのうち8点を図示した。F-1、2、4、5、6、7、8丸瓦はいずれも粘土紐巻き作りで、凹面に布目が明瞭に残り、凸面には繩叩きが残る有段の丸瓦である。繩叩き後にロクロナデ調整がみられる。多賀城出土瓦分類丸瓦II B類 (aタイプ) と考えられる (第77図1・2・4~6、第78図1・2)。F-9丸瓦は、中央部から狭端部にかけて欠損しているが、粘土紐巻き作りで凹面に布目が残り、凸面に繩叩き目とロクロナデが見られることから、丸瓦II B類に含まれるものと考えられる。



第77図 SI1堅穴造構出土遺物（1）



団版 番号	登録 番号	種別	器形	出土地點	法量 (cm)	成形・調整・備考	写真 図版
77-1	F-1	瓦	瓦瓦	SI1堅穴 中央 選構 研水溝	最大長：36.0 広端幅：18.3 扱端幅：15.7 玉縁最大長：6.4 玉縁広端幅：13.7 玉縁扶端幅：(37)	四面：粘土練痕→布目痕 凸面：撻印き→ロクロナデ→ヘラナデ 凹面：撻面、芯端面、芯端面へタケツリ	18-3
77-2	F-2	瓦	瓦瓦	SI1堅穴 中央 選構 研水溝	最大長：(39.2) 広端幅：(18.7) 扱端幅：17.2 玉縁最大長：6.7 玉縁広端幅：(9.0) 玉縁扶端幅：(10.6)	四面：粘土練痕→布目痕 凸面：撻印き→ロクロナデ	18-4
77-3	F-3	瓦	瓦瓦	SI1堅穴 北側 選構 研水溝	最大長：36.5 広端幅：19.7 扱端幅：17.2 玉縁最大長：6.7 玉縁広端幅：(14.6) 玉縁扶端幅：(13.2)	四面：粘土練痕→布目痕 凹面：撻印き→ロクロナデ 凹面：撻面、芯端面、芯端面へタケツリ	18-5
77-4	F-4	瓦	瓦瓦	SI1堅穴 中央 選構 研水溝	最大長：38.4 広端幅：17.5 扱端幅：(16.3) 玉縁最大長：7.4 玉縁広端幅：12.6 玉縁扶端幅：(6.9)	四面：布目痕 凸面：撻印き→ロクロナデ→ヘラナデ 凹面：撻面、芯端面、芯端面へタケツリ	18-6
77-5	F-5	瓦	瓦瓦	SI1堅穴 中央 選構 研水溝	最大長：(29.6) 広端幅：(18.0) 扱端幅：— 玉縁最大長：(4.8) 玉縁広端幅：(12.6) 玉縁扶端幅：—	四面：粘土練痕→布目痕 凸面：撻印き→ロクロナデ 凹面：芯端面へタケツリ	19-1
77-6	F-6	瓦	瓦瓦	SI1堅穴 中央 選構 研水溝	最大長：(32.8) 広端幅：(18.2) 扱端幅：(15.8) 玉縁最大長：(1.2) 玉縊広端幅：— 玉縊扶端幅：—	四面：粘土練痕→布目痕 凸面：撻印き→ロクロナデ 凹面：撻面、芯端面へタケツリ	19-2
78-1	F-7	瓦	瓦瓦	SI1堅穴 中央 選構 研水溝	最大長：39.9 広端幅：(17.0) 扱端幅：15.6 玉縊最大長：7.0 玉縊広端幅：(13.3) 玉縊扶端幅：(9.0)	四面：粘土練痕→布目痕 凸面：撻印き→ロクロナデ (摩耗なし) 凹面：撻面、芯端面へタケツリ	19-3
78-2	F-8	瓦	瓦瓦	SI1堅穴 中央 選構 研水溝	最大長：21.0 広端幅：14.7 扱端幅：— 玉縊最大長：— 玉縊広端幅：— 玉縊扶端幅：—	四面：粘土練痕→布目痕 凸面：撻印き→ロクロナデ 凹面：撻面、芯端面へタケツリ	19-4
78-3	F-9	瓦	瓦瓦	SI1堅穴 中央 選構 研水溝	—	四面：粘土練痕→布目痕 凸面：撻印き→ロクロナデ→ヘラナデ	19-5

第78図 SI1堅穴遺構出土遺物 (2)

3.まとめ

- (1) 1号窯跡と4号窯跡の灰原から出土した偏行唐草文軒平瓦は、唐草の方向が左から右へ向かう多賀城出土瓦分類の型番620である。型番620は、陸奥国分尼寺跡や多賀城跡から多く出土している他、陸奥国分寺跡からも少量出土しており、多賀城政府の時期区分のⅡ期に属するものである。このことから本窯跡は奈良時代中頃の瓦を焼いた窯跡群であることがわかった。
- (2) 1号窯跡出土の軒平瓦（G-9）と4号窯跡出土の軒平瓦（G-10・11・12・13・14・15）は、瓦当部の接合状況が異なるものである。1号窯跡軒平瓦は瓦当部側にヘラ刻みを施すもので型番620aタイプ、4号窯跡出土軒平瓦は、瓦当部側にヘラ刻みが入らない型番620bタイプである。このことから、複数の工人グループが作業にかかわった可能性がある。
- (3) 5号窯跡付近表採須恵器並びに灰原出土須恵器の底部のヘラ書き「上人」・「人」については、長岡京の溝SD1301から出土している本箇の中に同様の記載がある〔本箇789〕を見出すことができた。越前国から長岡京への米出荷の本箇でその解釈については、輸貢者を意味するものとされているが、今回出土した須恵器について同様の解釈ができるかについては、判定することはできなかった。類例や文献の調査を続け、検討を重ねる必要がある。
- (4) 与兵衛沼窯跡蟹津地区東地点では多賀城Ⅱ期、陸奥国分寺・尼寺創建期の窯跡が検出され、新堤地区では多賀城政府Ⅳ期の時期の窯跡が検出されていることから、この周辺では奈良時代半ばから平安時代はじめまで一貫して瓦製作が行われていたと考えられる。
- (5) 1号竪穴遺構は、周囲に窯跡が多く分布し、それに近接して発見されていることから、瓦製作に関わる工房跡とみられ、隣接する折江遺跡での竪穴工房も含め、古代陸奥国官窯を構成する造瓦所の一画であったことが想定される。

【第2章 引用・参考文献】

- 富田和夫 2009 「移民の携えた土器－北武藏・上野由来の－関東系土器」めぐって－』『古代社会と地域間交流－土器からみた関東と東北の様相－』 国立館大学考古学会編
- 仙台市教育委員会 1990 「郡山遺跡第-84・85次発掘調査報告書－」『仙台市文化財調査報告書第145集』
- 仙台市教育委員会 1995 「郡山遺跡XV」『仙台市文化財調査報告書第194集』
- 仙台市教育委員会 2003 「郡山遺跡23」『仙台市文化財調査報告書第263集』
- 仙台市教育委員会 2004 「郡山遺跡24」『仙台市文化財調査報告書第269集』
- 仙台市教育委員会 2006 「郡山遺跡26」『仙台市文化財調査報告書第296集』
- 仙台市教育委員会 2012 「郡山遺跡 他」『仙台市文化財調査報告書第405集』

【第3章 引用・参考文献】

- 今泉隆雄「第3章四 越前国の米荷札」『長岡京木簡一 解説』向日市教育委員会
- 古窯跡研究会 1973 「陸奥国官窯跡群－台の原古窯跡調査研究報告－」
- 仙台市教育委員会 2010 「与兵衛沼窯跡」『仙台市文化財調査報告書第366集』
- 財团法人向日市埋蔵文化財センター 1993 「長岡京木簡二 解説」『向日市埋蔵文化財調査報告書第35集』
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1982 「多賀城跡 政府跡 本文編」



1. 調査区遠景（東から）



2. 1～5号窯全景（南西から）



3. 1号窯全景（南から）



4. 2号窯全景（南から）



5. 4号窯全景（南から）



6. 4号西側灰原全景（南から）



7. 5号窯全景（南から）



8. 5号窯跡灰原出土遺物（南から）



9. 6号窯検出状況（西から）



10. 7・8号窯検出状況（西から）



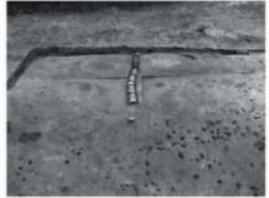
11. 9号窯検出状況（南から）



12. 11・14・15号窯跡検出状況（東から）



13. 13号窯跡検出状況（東から）

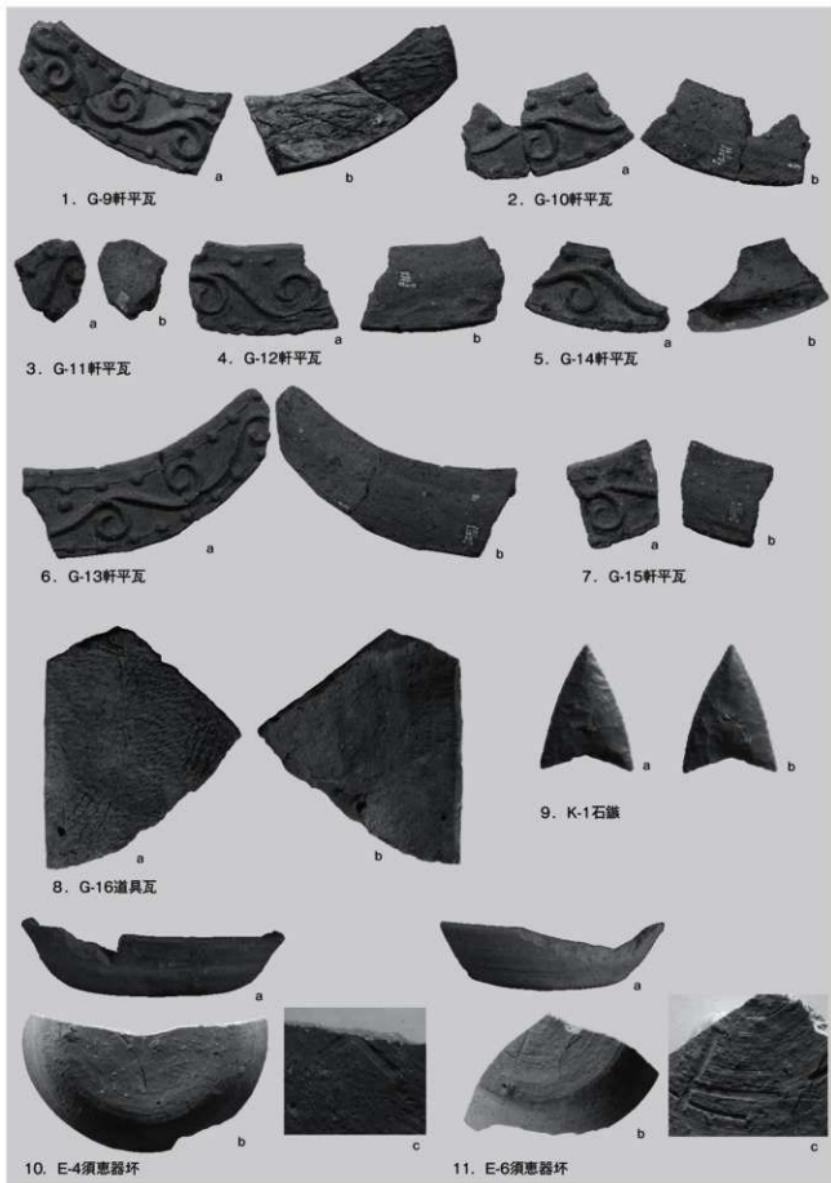


14. SI1全景（南から）

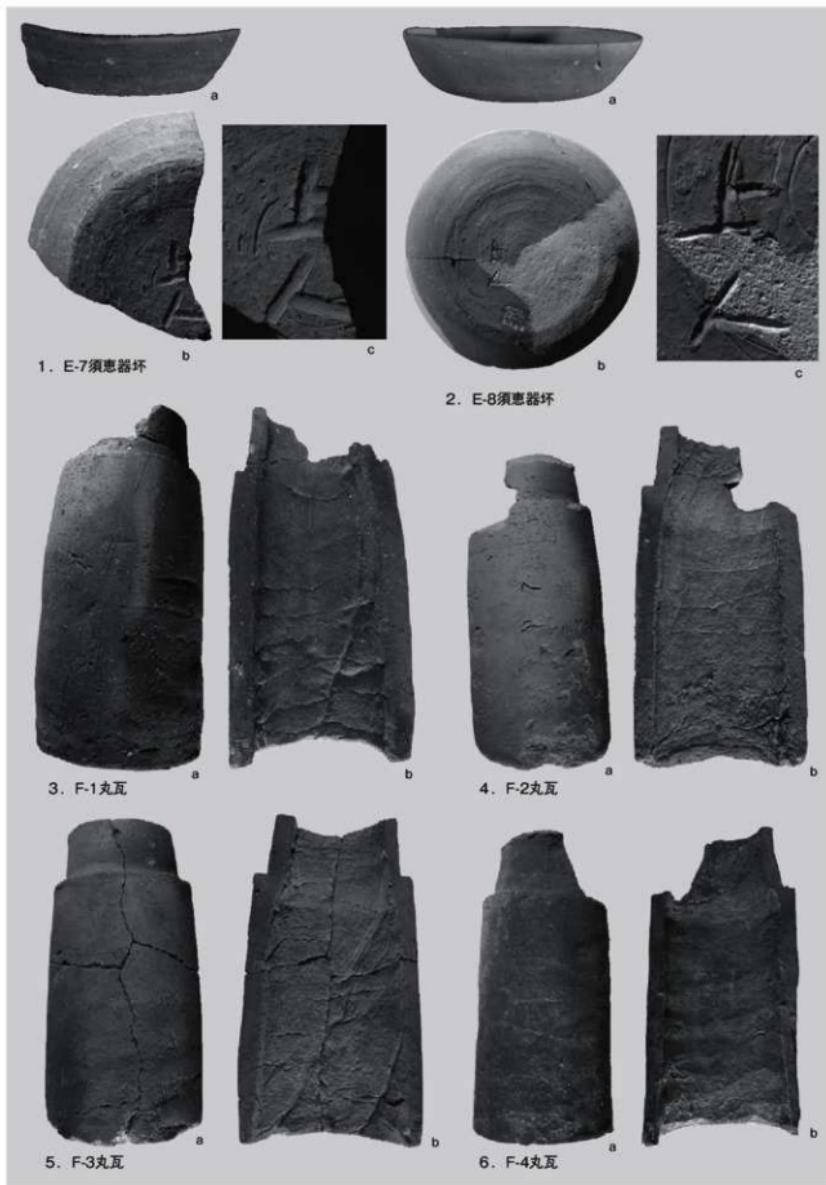


15. SI1施設瓦全景（西から）

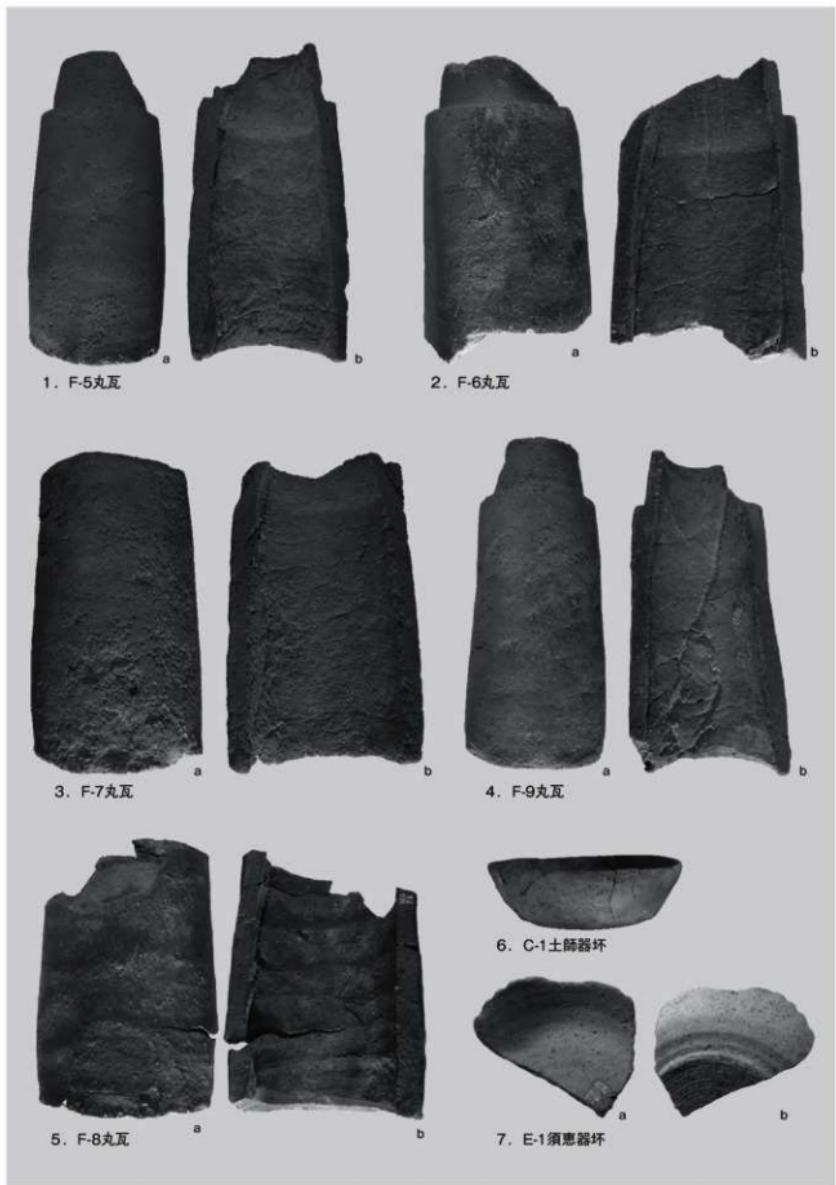
写真図版16 与兵衛沼窯跡蟹沢地区南地点



写真図版17 与兵衛沼窯跡出土遺物（1）



写真図版18 与兵衛沼窯跡出土遺物（2）



写真図版18 与兵衛沼窯跡出土遺物（3）

第4章 調査成果の普及と関連活動

1. 主な広報・普及・協力活動

年月日	行事名称	担当	主催
2012. 6. 3	与兵衛沼窯跡 遺跡見学会	整備活用係	一般市民
7. 3	郡山遺跡美化活動	整備活用係	仙台市立八木松小学校6年生
7. 6	郡山遺跡美化活動	整備活用係	仙台市立東長町小学校6年生
8. 21~23	職場体験学習	石山・大久保	仙台市立八木山中学校2年生5名
8. 22~24	職場体験学習	石山・大久保	仙台市立中田中学校2年生5名
9. 25~27	職場体験学習	石山・大久保	仙台市立長町中学校2年生5名
10. 3	郡山遺跡ビロティ見学	木村・石山	多元的古代研究会
10. 15~19	職場体験学習	石山・大久保	仙台市立青陵中等教育学校前期課程2年生3名
11. 6~8	職場体験学習	石山・大久保	仙台市立袋原中学校2年生2名
11. 12~16	職場体験学習	石山・大久保	仙台市立柳生中学校2年生5名
11. 12~16	職場体験学習	石山・大久保	仙台市立富沢中学校2年生4名
11. 20~22	職場体験学習	石山・大久保	仙台市立郡山中学校2年生5名
2013. 1. 21 1. 28 2. 4 2. 18 2. 25	文化財サポーター会 郡山庵寺瓦接合体験	整備活用係	文化財サポーター会
1. 30	郡山遺跡ビロティ見学	木村・石山	せんだい農耕学園ふるさと文化コース2年第6班
3. 16~24	被災ミュージアム再興事業に 係る展示会	整備活用係	一般市民（主催：文化庁・宮城県文化財 保護課・仙台市文化財課）
2012. 4. 8~ (毎月8日)	薬師堂手づくり市	整備活用係	一般市民（主催：薬師堂手づくり市実行 委員会）



郡山遺跡美化活動



職場体験学習

報 告 書 抄 錄

仙台市文化財調査報告書第417集

郡山遺跡 33

平成24年度発掘調査概報
— 郡山遺跡・与兵衛沼窯跡 —

2013年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1

文化財課 TEL 022（214）8893

印刷 毛 リ タ 印 刷 株 式 会 社

仙台市太白区郡山八丁目20-30

TEL 022（246）0105

